

解題

初學詩法 一卷

貝原篤信著

貝原篤信字は子誠、益軒又た損軒と號す、通稱は久兵衛、筑前の人、世、福岡侯に仕ふ、明曆中京師に遊び、松永尺五、山崎闇齋、木下順庵の諸儒に従ひて學ぶ、老に及び藩侯の禮遇甚だ渥し、正徳四年歿す、年八十五、

此書は古今の詩に關する説話を集め、項を分ちて之を録す、大抵平易穩當なるものを選び、初學をして正路に向はしめんことを期せり。(延寶八年七月新刊)

初學詩法序

風雅之道載在于三百篇。至哉學者得朝夕吟咏之餘者豈曰小補哉。與蘇李而往古詩之去風騷已遠矣。洎近體格律之聲興去古詩又加遠何也。詩以言志拘于對儷聲律則專從事乎句字組織之間而不得發乎情性也。國俗之言詩者往往以拘忌爲定式與中華近體之格律不同。又無知其規格之所由出者蓋所謂不知而妄作者也。其去古昔風雅之道何啻千里哉。夫作詩真一小技於道所未爲貴也。然則學者之於詩不學則已苟欲學之不知其法度而妄作可乎。古人論詩者凡若干家倭漢印行之書亦多矣。學者之於詩法也豈置其書乎。然而倭俗詩法之謬舊矣。學者終身由之而不知其道者衆也。不可亦歎乎。予固不知詩且不揣僭妄輯古來詩法之切要者約以爲一書庶覺俗間初學之習而不察者而已。博雅之士改而

正マム之ヲ惟レ幸ナラシ也ド

延寶己未十月望日

紫陽後學員原篤信書

初學詩法目錄

詩學綱領一

古詩二

律詩排律附三

絕句四

律詩絕句用韻法五

雜體六

句法七

總論詩法八

論詩人九

目錄終

夜用書目

書經

蔡氏書傳

周禮

詩人玉屑

詩林廣記

滄浪詩話

冰川詩式

文章辨體

文體明辨

事文類聚

杜工部集

白氏文集

潛確類書

事言要玄

韻語陽秋

石林詩話

沈存中筆談

二程全書

司馬溫公集

朱子語類

朱子大全

唐書

性理大全

詩經大全

真西山集

宋類苑

呂氏童蒙訓

解經文集

顏氏家訓

居家必備

詩法源流

詩法指南

學範

聯珠詩格

明文選

吳臨川集

唐詩訓解

源流至論

事物紀原

圓機活法

日本詩話叢書

徐氏筆精

魏莊渠集

羣書拾唾

詩法入門

二

初學詩法

○詩學綱領第一

釋典、帝曰詩言志、歌永言、聲依永、律和聲。○朱子曰詩之作、本言志而已、方其詩也、未有歌也、及其歌也、未有樂也、以聲依永、以律和聲、則樂乃爲詩而作、非詩爲樂作也、又曰詩者樂之章也、又曰詩本於人之情性、有美刺風喻之旨、其言近而易曉、而從容詠嘆之間、所以漸漬感動於人者、又爲易入、又曰志者詩之本而樂者末也、○蔡沈曰、心之所之者、乃謂之志、心有所之、必形于言、故曰詩言志、

初學詩法

筑州後學貝原篤信編輯

○詩學綱領第一

釋典に、帝の曰、詩は志を言ひ、歌は言を永ふし、聲は永きに依り、律は聲を和す、○朱子の曰、詩の作、本と志を言ふのみ、其詩に方りてや、未だ歌ふ有らず、其歌ふに及んでや、未だ樂あらざるなり、聲は永きに依るを以てし、律は聲を和するを以すれば、則樂は乃詩の爲にして作る、詩は樂の爲にして作るに非ざるなり、又曰詩は樂の章なり、又曰詩は人の情性に本づいて、美刺風喻の旨あり、其言近ふして曉し易し、而して從容詠嘆の間漸漬して人を感動する所以の者、又入り易しと爲す、又曰志は詩の本にして樂は末なり、○蔡沈が曰、心之之く所の者、乃之れを志と謂ふ、心之く所有れば、必言に形る故に曰、詩は志を言ふと、○荀勗が曰、詩は古の歌章と、○文體明辨に曰、詩の大序に云、詩は志之之く所なり、心に在るを志と

○荀勗曰、詩者古之歌章、○文體明辨曰、詩大序云、詩者志之所之也、在心爲志、發言爲詩、卽書所謂詩言志者也。

周禮、大師教六詩、曰風、曰賦、曰比、曰興、曰雅、曰頌、以六德爲之本、中和祇庸孝友、以六律爲之音、云云、○程子曰、學詩而不分六義、豈能知詩也、詩有六義、曰風者、謂風動之也、曰賦者、謂鋪陳其事也、曰比者、直比之、溫其如玉之類是也、曰興者、因物而興起、關關雎鳩、瞻彼淇澳之類是也、曰雅者、雅言正道、天生烝民、有物有則之類是也、曰頌者、稱頌德美、有斐君子、終不可諼兮之類是也、○朱子曰、風雅頌者、聲樂部分之名也、賦比興、則所以製作風雅頌之體也、賦者直陳其事、如葛覃

爲し、言に發するを詩と爲すと、卽書に謂はゆる詩は志を言ふ者なり。

二

周禮に大師、六詩を教ゆ、曰風、曰賦、曰比、曰興、曰雅、曰頌、六德を以て之れが本と爲す、中和祇庸孝友、六律を以て之れが音と爲すと云云、○程子の曰、詩を學んで六義を分たずんば、豈能く詩を知らんや、詩に六義あり、風といふは之れを風動するを謂ふ、賦と曰ふは其事を鋪陳するを謂ふ、比と曰ふは直に之れを比す、溫なること其れ玉の如しの類是なり、興と曰ふは物に因りて興起す、關々たる雎鳩、彼淇の澳を瞻るの類是なり、雅と曰ふは雅しく正道を言ふ、天生烝民を生ず、物あれば則ありの類是なり、頌と曰ふは德の美を稱頌す、斐たるある君子、終に諼る可からずの類是なり、○朱子の曰、風雅頌は、聲樂部分の名なり、賦比興は、則風雅頌を製作する所以の體なり、賦は直に其事を陳ぶ、葛覃卷耳の類の如き是なり、比は彼

卷耳之類是也。比者以彼狀此。如蓬斯綠衣之類是也。興者託物興詞。如關雎兔置之類是也。又曰。周禮大師掌六詩。大序謂之六義。蓋古今聲詩。條理無出此者。風則閭巷風土。男女情思之詞。雅則朝會燕享公卿大夫之作。頌則鬼神宗廟祭祀歌舞之樂。又曰。當時朝廷作者。雅頌是也。若國風。乃採詩者採之。民間。以見四方民情之美惡。二南亦是採民言。而被樂章爾。詩傳又曰。賦者敷陳其事。而直言之者也。比者以彼物比此物也。興者先言他物。以引起所詠之詞也。興起也。引物以起吾意。又曰。凡直指其名。直叙其事者。賦也。引物爲況者。比也。本要言其事。而虛用兩句。鈎起。因而接續者。興也。又曰。比是以一物比

を以て此れに狀たづむる。蓬斯綠衣の類の如き是なり。興は物に託して詞を興す。關雎兔置の類の如き是なり。又曰。周禮に大師六詩を掌る。大序に之れを六義と謂ふ。蓋古今の聲詩條理。此れに出づる者なし。風は則閭巷の風土。男女情思の詞。雅は則朝會燕享公卿大夫の作。頌は則鬼神宗廟祭祀歌舞の樂。又曰。當時朝廷の作は雅頌是なり。國風の若きは。乃詩を採る者。之れを民間に採りて。以て四方民情の美惡を見る。二南も亦是言を採りて。樂章に被らしむるのみ。詩傳に又曰。賦は其事を敷き陳べて。直に之れを言ふものなり。比は彼物を以て。此物に比するなり。興は先づ他物を言ふて。以て詠する所の詞を引き起すなり。興は起なり。物を引て。以て吾意を起す。又曰。凡そ直に其名を指し。直に其事を叙ぶるは賦なり。物を引て況を爲すは比なり。本と其事を言はんと要して。而して虛しく兩句を用て鈎起し。因て接續するは興なり。又曰。比は是れ一物を以て一物に比して。指す所の事常に言外に在り。興は是れ彼の一物を借りて。以て此事を引起

一物所指之事常在言外、與是借彼一物以引起此事、而其事常在「下句」又曰、說出那箇物事來是興、不說出那個物事是比、如「南有喬木、只是說漢有遊女、奕奕寢廟君子作之、只說個他人有心、予忖度之、皆是興體、比體只是從頭比下來不說破、與比相近卻不同、又曰、如「藥砧今何在、何日大刀頭、此是比體、與之爲言起也、言興物而起意、後來古詩猶有此體、如「青青原上柏、磊磊澗中石、人生天地間、忽如遠行客、又如「高山有厓、林木有枝、憂來無端、人莫之知、皆是也、又曰、三經是風雅頌、是做詩底骨子、賦比興卻是裏面橫串底、都有賦比興、故謂「三緯」、○廬陵彭氏曰、李賢良云、詩者古之歌曲、其聲之曲折、氣之高

して、而して其の事は常に下句に在り、又曰、那箇の物事を説き出し來るは是れ興、那箇の物事を説き出さざるは是れ比、南に喬木ありといふが如き、只是れ漢に遊女あることを説く、「奕々たる寢廟君子之れを作す」とは、只個の「他人心あり、予之れを忖り度る」といふを説く、皆是れ興の體、此の體は、只是頭より比し下し來りて説き破らず、與比相近くして卻て同じからず、又曰、「藥砧今何に在る、何れの日か大刀頭」といふが如き、此れは是れ比の體、興の言たるは起なり、物を興して而して意を起すを言ふ、後來古詩猶此體あり、「青青たる原上の柏、磊々たる澗中の石、人、天地の間に生る、忽たること、遠行の客の如し」といふが如き、又「高山厓あり、林木枝あり、憂來りて端なし、人之れを知ることなし」といふが如き、皆是なり、又曰、「三經は是風雅頌、是れ詩を做す底の骨子、賦比興は卻て是れ裏面横串底、都て賦比興あり、故に三緯と謂ふ」、○廬陵の彭氏が曰、李賢良が云ふ、詩は古の歌曲、其聲の曲折、氣の高下、詩を作るの始、或は風と爲り、小雅と爲り、大

下、作詩之始、或爲風、爲小雅、爲大雅、爲頌、風之聲、不可以入雅、雅之聲、不可以入頌、不待大師與孔子而後分、風雅頌乃其音、而賦比興乃其體也、○明梁橋曰、詩有六義、實則三體、風雅頌者、詩之體、賦比興者、詩之法、故賦比興、又所以製作乎風雅頌、凡詩中有賦起、有比起、有興起、風之中有賦比興、雅頌之中亦有賦比興、此詩學之正源、作者之準則。

詩大序曰、關雎后妃之德也、風之始也、所以風化天下、而正夫婦也、故用之鄉人、焉、用之邦國、焉、風、風也、教也、風以動之、教以化之、詩者、志之所之也、在心爲志、發言爲詩、情動於中、而形於言、言之不足、故嗟嘆之、嗟嘆之不足、故永歌之、永歌之不足、不知手之舞足之

雅と爲り、頌と爲る、風の聲、以て雅に入る可からず、雅の聲、以て頌に入る可からず、大師と孔子とを待て、而して後分るゝに、あらず、風雅頌は乃其音にして、而して賦比興は乃其體なり、○明の梁橋が曰、詩に六義あり、實は則三體、風雅頌は詩の體、賦比興は詩の法、故に賦比興は、又風雅頌を製作する所以、凡詩中に賦起あり、比起あり、風の中に賦比興あり、雅頌の中にも亦賦比興あり、此れ詩學の正源、作者の準則なり。

詩の大序に曰、關雎は后妃の徳なり、風の始めなり、天下を風化して、而して夫婦を正ふる所以なり、故に之れを郷人に用ひ、之れを邦國に用ゆ、風は風なり、教なり、風以て之れを動かし、教以て之れを化す、詩は志の之く所なり、心に在るを志と爲し、言に發するを詩と爲す、情其中に動きて、而して言に形はる、之れを言ふて足らず、故に之れを嗟嘆す、之れを嗟嘆して、足らず、故に之れを永

陷之也、情發於聲、聲成文、謂之音、治世之音、安而以樂、其政和、亂世之音、怨以怒、其政乖、亡國之音、哀以思、其民困、故正得失、動天地、感鬼神、莫近於詩、先王以是、經夫婦、成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗、故詩有六義焉、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌、上以風化下、下以風刺上、主文而譎諫、言之者無罪、聞之者足以自戒、故曰風、至于王道衰、禮義廢、政教失、國異政、家殊俗、而變風變雅作矣、國史明乎得失之跡、傷人倫之廢、哀刑政之苛、吟詠性情、以風其上、達於事變、而懷其舊俗者也、故變風發乎情、止乎禮義、發情民之性也、止禮義先王之澤也、是以一國之事、繫一人之本、謂之風、言天下之事、形四方

六

歌す、之れを永歌して足らざれば、手の舞ひ足の之れを踏むことを知らざるなり、情は聲に發して、聲は文を成す、之れを音と謂ふ、治世の音は安ふして而して樂しみ、其政和く、亂世の音は怨みて以て怒り、其政乖く、亡國の音は哀みて以て思ふ、其民困む、故に得失を正し、天地を動かし、鬼神を感ぜしむるは詩より近きは莫し、先王是を以て夫婦を經して孝敬を成し、人倫を厚くし、教化を美にし、風俗を移す、故に詩に六義あり、一に曰風、二に曰賦、三に曰比、四に曰興、五に曰雅、六に曰頌、上以て下を風化し、下以て上を風刺す、文を主として、譎諫す、之れを言ふ者は罪なく、之れを聞く者は以て自ら戒むるに足る、故に風と曰ふ、王道衰へ禮義廢れ、政教失ひ、國、政を異にし、家、俗を殊にするに至り、而して變風變雅作る、國史は得失の跡を明かにし、人倫の廢れるを傷み、刑政の苛を哀み、情性を吟詠し、以て其上を風す、事變に達して、而して其舊俗を懷ふ者なり、故に變風は情に發して、禮儀に止まる、情に發するは民の性なり、禮義に止まるは先王

之風、謂之雅。雅者正也。言王政之所由廢興也。政有小大。故有小雅焉。有大雅焉。頌者美盛德之形容。以其成功。告於神明者也。是謂四始。詩之至也。然則關雎麟趾之化。王者之風。繫之周公。南言化自北而南也。鵲巢騶虞之德。諸侯之風也。生王之所以教。故繫之召公。周南召南。正始之道。王化之基。是以關雎樂得淑女。以配君子。憂在進賢。不淫其色。哀窈窕。思賢才。而無傷善之心焉。是關雎之義也。

程子曰。興於詩者。吟咏情性。涵暢道德之中。而歆動之。有吾與點之氣象。

朱子曰。詩者志之所之。在心爲志。發言爲詩。然則詩豈復有工拙哉。亦視其志之所向者。

の澤なり。是を以て一國の事は一人の本に繋る。之れを風と謂ふ。天下の事を言ひ、四方の風を形す。之れを雅と謂ふ。雅は正なり。王政の由りて廢興する所を言ふ。政に小大あり。故に小雅あり。大雅あり。頌とは盛德の形容を美めて、其成功を以て神明に告ぐる者なり。是れを四始と謂ふ。詩の至なり。然らば則關雎麟趾の化は王者の風。之れを周公に繋く。南とは化。北よりして南するを言ふなり。鵲巢騶虞の德は諸侯の風なり。王の教ふる所以を生す。故に之れを召公に繋く。周南召南は、正始の道。王化の基。是を以て關雎は、淑女を得て以て君子に配するを樂しむ。憂は賢を進むるにありて、其色に淫せず。窈窕賢才を思ふて、善を傷ふの心なきを哀しむ。是れ關雎の義なり。

程子曰。詩に興るとは、情性を吟咏し、道德の中に涵暢し、而して之れを歆動す。吾れは點に與せんの氣象あり。

朱子の曰。詩は志の之く所。心に在るを志と爲し、言に發するを詩と爲す。然らば則詩豈復工拙あらんや。亦其志

高下如何耳。是以古之君子、德足以求其志、必出於高明純一之地、其於詩、固不學而能之。至於格律之精粗、用韻屬對、比事遣辭之善否、今以魏晉以前諸賢之作考之、蓋未有用意於其間者、而況於古詩之流乎。近世作者、乃始留情於此、故詩有工拙之論、而葩藻之詞勝、言志之功隱矣。

朱子與鞏仲至書、古今之詩、凡有三變、蓋自書傳所說虞夏以來、下及魏晉、自爲一等、自晉宋間顏謝以後、下及唐初、自爲一等、自沈宋以後、定著律詩、下及今日、自爲一等。然自唐初以前、其爲詩者、固有高下、而法猶未變、至律詩出、而後詩之與法、始大變、及至今日、益巧益密、而無復古人之風矣。故嘗妄欲抄

の向ふ所の者高下如何んと視るのみ、是を以て古の君子は、德以て其志を求むるに足り、必高明純一の地に出づ、其詩に於る、固に學ばずして之れを能す、格律の精粗、韻を用ひ屬對、比事遣辭の善否に至りては、今魏晉以前諸賢の作を以て、之れを考ふるに、蓋未だ意を其間に用ふる者有らず、而るを況や古詩の流（た）ひに於ておや近世の作者乃始めて情を此に留む、故に詩工拙の論ありて、而して葩藻の詞勝ち、志を言ふの功隱る。

朱子、鞏仲至に與ふる書に、古今の詩、凡三變あり、蓋書傳に説く所の虞夏より以來、下、魏晉に及んで、自ら一等と爲す、晉宋の間顏謝より以後、下、唐の初に及んで、自ら一等と爲す、沈宋より以後、律詩を定著して、下、今日に及んで、自ら一等と爲す、然して唐初より以前、其詩たる者、固に高下ありて、而して法猶未だ變ぜず、律詩の出づるに至りて、而して後詩と法と始めて大に變ず、今日に至るに及んで、益巧に益密にして、而して復古人の風なし、

取經史諸書所載韻語、下及文選漢魏古詞、以盡乎郭景純、陶淵明之所作、自爲一編、而附于三百篇楚辭之後、以爲詩之根本準則、又於其下二等之中、擇其近於古者、各爲一編、以爲之羽翼與衡、且以李杜言之、則如李古風五十首、杜之秦蜀紀行、遺興、出塞、潼關、石澗、夏日、夏夜諸篇律詩、則如王維、韋應物輩、亦有蕭散趣、未至如今日之細碎卑冗、無餘味也、其不合者、則悉去之、不使之接於吾之耳目、而入吾之胸次、要使方寸之中、無一字世俗言語意思、則其爲詩不期於高遠、而自高遠矣。

聖人感人心、而天下和平、感人心者、莫先乎情、莫始乎言、莫切乎聲、莫深乎文、故詩貴和

故に嘗て妄に經史諸書に載する所の韻語、下文選漢魏の古詞に及ぶまでを抄取して、以て郭景純、陶淵明の作れる所を盡して、自ら一編と爲し、而して三百篇楚辭の後に附して、以て詩の根本準則と爲さんと欲す、又其下二等の中に於て、其古に近き者を選んで、各一編と爲し、以て之れが羽翼與衡と爲し、且李杜を以て之れを言へば、則李が古風五十首、杜が秦蜀の紀行、遺興、出塞、潼關、石澗、夏日、夏夜の諸篇の如き、律詩は則王維、韋應物が輩の如き、亦蕭散の趣あり、未だ今日の細碎卑冗にして餘味なきが如きに至らず、其合はざる者は、則悉く之れを去りて、之をして吾耳目に接して、而して吾胸次に入れしめず、方寸の中をして一字世俗の言語意思ならしめんと要す、則其詩たる高遠を期せずして、而して自ら高遠ならん。

聖人、人心を感ぜしめて、而して天下和平なり、人心を感ぜしむるは情より先なるは莫く、言より始めなるは莫く、聲より切なるは莫く、文より深きは莫し、故に詩は和

平、令人易曉、溫柔敦厚、詩之本教也、劉禹錫
 作詩、不知風雅之意、不可以作詩、詩尙譎諫、
 唯言之者無罪、聞之者足以戒、乃爲有補、若
 諫而涉於毀謗、聞者怒之、何補之有、楊龜山、
 下同、

君子之所養、要令暴慢邪僻之氣、不設於身
 體、陶淵明所不可反者、冲澹深粹、出於自然、
 若曾用力學詩、然後知淵明詩非著力之所
 能成、私意去盡、然後可以應世、

詩之學尙矣、原於賡歌、委於風雅、風雅之變、
 而溢焉者也、湘纍之騷、又其流也、子虛長楊
 之賦作、而騷幾亡矣、黃初而降、日以澌薄、惟
 彭澤一源、來自天稷、與衆殊趣、而淡薄平易、
 玩嗜者少、隋唐之間、否亦極矣、杜陵之出、愛

平にして人をして曉り易からしむるを貴ぶ、溫柔敦厚は
 詩の本教なり、劉禹錫
 詩を作るに風雅の意を知らずんば、以て詩を作る可ら
 ず、詩は譎諫を尙ぶ、唯之れを言ふ者罪なく、之れを聞く
 者以て戒むるに足りて乃補ありと爲す、若し諫めて毀謗
 に涉れば、聞く者之れを怒る、何の補か之れあらん、楊龜山、
 下同、

君子の養ふ所、暴慢邪僻の氣をして身體に設けざらしめ
 んと要す、陶淵明が及ぶ可からざる所の者は、冲澹深粹
 自然に出づ、若し會ち力を用ひて詩を學んで、然して後、
 淵明が詩力を著ることの能く成す所に非ざることを知
 らん、私意去り盡して、然して後以て世に應ず可し、

詩の學尙し、賡歌に原づき、風雅に委す、風雅の變ずるは
 溢るゝ者なり、湘纍の騷は、又其流れなり、子虛長楊の賦
 作りて而して騷亡に幾し、黃初よりして而降日に以て
 澌薄なり、惟、彭澤の一派、天稷より來りて、衆と趣を殊に
 して、而して淡薄平易、玩嗜するもの少なし、隋唐の間、否
 亦極りぬ、杜陵が出づる、君を愛し時を悼み、騷雅に追躡

君悼時、追躡騷雅、而才力宏厚、偉然足以鎮浮靡、詩家爲之中興。陸象山

詩以道性情之真、十五國風有田夫閨婦之辭、而後世文士不能及者何也、發乎自然而非造作也、漢魏迄今、詩凡幾變、其間宏才實學之士、縱橫放肆、千彙萬狀、字以鍊而精、句以琢而巧、用事取其切、模擬取其似、功力極矣、而識者乃舍旃、而尙陶韋、則亦以其不鍊字、不琢句、不用事、而情性之真、近乎古也、今之詩人、隨其能而有所尙、各是其是、孰有能知真是之歸者哉。吳臨川

事物紀原曰、樂書曰、伏羲之樂曰立基、神農之樂曰下謀、夫樂必有章、樂章之謂詩、始於太昊之世。

して、而して才力宏厚、偉然として、以て浮靡を鎮むるに足れり、詩家之れを中興とす。陸象山

詩は以て性情の眞を道ふ、十五國風、田夫閨婦の辭あり、而して後世の文士及ぶ能はざる者は何ぞや、自然に發して造作に非ざるなり、漢魏より今に追んで、詩凡そ幾變ぞ、其間宏才實學の士、縱橫放肆、千彙萬狀、字は鍊りて精きことを以てし、句は琢たくいて巧なることを以てす、事を用ふるは其切なるを取り、模擬は其似たるを取る、功力極りぬ、而して識者乃これを捨て、而して陶韋を尙ぶ、則亦其字を鍊らず、句を琢かず、事を用ひずして、而して情性の眞古に近きを以てす、今の詩人、其能に隨ひて而して尙ぶ所あり、各、其是を是とす、孰れか能く真是の歸むきを知る者あらんや。吳臨川

事物紀原に曰、樂書に曰、伏羲の樂を立基と曰ふ、神農の樂を下謀と曰ふ、夫れ樂には必章あり、樂章を之れ詩と謂ふは、太昊の世に始まる。

林少穎曰、舜與皋陶之賡歌、三百篇之權輿也、學詩者當自此始。

三百篇詩之祖也、楚人之騷、漢魏之樂府、五言古詩、去古不遠、六義未乖、所當誦法、唐人近體興、而詩一大變、然可兼爲、不可專攻者也、天爵堂筆餘

詩學亦難言矣、然大要不越三百篇之旨、或興或賦、或比、而分途、則美刺兩端耳、美不貴、諷、諷近諂、刺不貴、激激近暴、諂者喪氣節、暴者干罪戾、安在其爲性情之正哉、故善宗三百篇者、於詩義、則思過半矣、劉伯溫

古者雅頌、陳於閭燕、二南用之房中、所以閑邪僻而養中正也、衛武公作抑戒、以自警、卒爲時賢相、以楚靈王之無道、一聞祁招情情

林少穎が曰、舜と皋陶との賡歌は、三百篇の權輿なり、詩を學ぶ者、當に此れより始むべし。

三百篇は詩の祖なり、楚人の騷、漢魏の樂府、五言古詩、古を去ること遠からず、六義未だ乖かず、當さに誦法すべき所なり、唐人の近體興りて、而して詩一たび大に變ず、然れども兼ねて爲す可し、專に攻む可からざるものなり。

天爵堂筆餘

詩學も亦言ひ難し、然れども大要三百篇の旨に越えず、或は興或は賦或は比、而して途を分ては、則美刺兩端のみ、美は諷を貴ばず、諷は諂に近し、刺は激を貴ばず、激は暴に近し、諂は氣節を喪ひ、暴なる者は罪戾を干す、安ぞ其性情の正とするに在らんや、故に善く三百篇を宗とする者は、詩の義に於て、則思半に過ぎん、劉伯溫

古は雅頌、閭燕に陳て、二南之れを房中に用ふ、邪僻を閑て、而して中正を養ふ、所以なり、衛の武公、抑戒を作りて、以て自ら警む、卒に時の賢相と爲る、楚の靈王之無道な

之語、凜然爲之不寧、詩之感人也如此、於後
斯義寢亡、凡日接其君之耳者、樂府之新聲、
梨園法曲而已、其不蕩心而溺志者幾希、
西山

西山

題號不同 詩訖于周、雖騷訖于楚、是後詩
人流爲二十四名、賦、頌、銘、贊、文、誄、箴、詩、行、詠、
吟、題、怨、歎、章、篇、操、引、謠、謳、歌、曲、詞、調、自操而
下八名、皆是起於郊祭、軍賓、吉凶、苦樂、由詩
而下九名、皆屬事而作、雖題號不同、悉謂之
詩、元稹集

差堯章曰、操、操者操也、君子操守有曲、
操者、雖、匠、窮、不、失、其、操、也、曲、雜、比、
高、下、長、短、謂、之、曲、吟、吁、嗟、感、傷、如、
委、曲、以、盡、其、意、也、吟、吁、嗟、感、傷、如、
引、之、謠、非、徒、歌、謂、之、謠、律、詩、有、
對、偶、音、律、
又曰、守法度曰詩、放情曰歌、體如行書曰行、

初學詩法

るを以て、一たび祇招惜々の語を聞て、凜然として之れ
が爲めに寧からず、詩の人を感ずること此の如し、後に
於て斯義寢く亡びぬ、凡そ日に其君の耳に接する者は、
樂府の新聲梨園の法曲のみ、其心を蕩かして志を溺らさ
ざる者は幾希し。 眞西山

題號同じからず 詩は周に訖り、雖騷は楚に訖る、是後
詩人流れて二十四名と爲る、賦、頌、銘、贊、文、誄、箴、詩、行、
詠、吟、題、怨、歎、章、篇、操、引、謠、謳、歌、曲、詞、調、なり、操より
而下の八名は、皆是郊祭軍賓吉凶苦樂に起る詩よりし
て而下の九名は、皆事に屬して作る、題號同じからずと
雖、悉之れを詩と謂ふ、元稹集

差堯章曰、操、操は操なり、君子操守常あり、曲、
高、下、長、短、謂、之、曲、吟、吁、嗟、感、傷、如、
委、曲、以、以、其、意、也、吟、吁、嗟、感、傷、如、
引、之、謠、非、徒、歌、謂、之、謠、律、詩、有、
對、偶、音、律、
又曰、法度を守るを詩と曰ひ、情を放つを歌と曰ひ、體、行

象之曰歌行序先後載始末曰引吁嗟感慨
悲如蚤蚤曰吟隱著諸音而通俚俗曰謠聲
音高下委曲盡情曰曲操安有常雖阨窮猶
不失其操曰操。

文之精者無如詩詩者志之所之也然則觀
其詩其人之心可見矣司馬溫公

解縉曰漢魏質厚於文六朝華浮於實具文
質之中得華實之宜惟唐人爲然故後之論
詩以唐爲尙宋人以議論爲詩元人粗豪不
脫氈裘童酪之氣。

風雅頌既亡一變而爲離騷再變而爲西漢
五言三變而爲歌行雜體四變爲沈佳宋問

律詩滄浪詩話

吳寬曰詩可以觀人之性情情性褊隘者其

書の如きを行と曰ひ之れを兼ねたるを歌行と曰ひ先
後を序で始末を載するを引と曰ひ吁嗟感慨悲み蚤蚤
の如きを吟と曰ひ諧音を隱著して俚俗に通するを謠と
曰ひ聲音高下委曲に情を盡すを曲と曰ひ操守常あり
阨窮すと雖猶其操を失はざるを操と曰ふ。

文の精き者は詩に如くは無し詩は志の之く所なり然
らば則其詩を觀て其人の心見つ可し司馬溫公

解縉が曰漢魏は質文より厚し六朝は華實より浮たたり
文質の中を具へ華實の宜きを得るは惟唐人を然りと
すと故に後の詩を論する唐を以て尙しと爲す宋人は
議論を以て詩と爲し元人は粗豪にして氈裘童酪の氣を
脱せず。

風雅頌既に亡びて一變して離騷と爲り再變して西漢
の五言と爲り三變して歌行雜體と爲り四變して沈佳宋問
之の律詩と爲る滄浪詩話

吳寬が曰詩は以て人の性情を觀つ可し情性褊隘なる

詞躁、寬裕者其詞平、端靖者其詞雅、疏曠者其詞逸、雄偉者其詞壯、醞藉者其詞婉、涵養性情發於氣形於言、此詩之本源也。

唐書曰、建安后詩律屢變、至沉約以音韻相婉付、及宋之問沉佺期又加靡麗、句忌聲病、如錦綉成文學者宗之。

羌堯章曰、問前輩謂人工於字、工於畫者、皆謂玩物喪志、與稽康鍊鍛、阮孚蠟屐、虛費精神、世無補、今之工詩得非類乎、此耶、范氏曰、夫子刪詩、列於六經、謂其可以興、可以觀、可以羣、可以怨、邇之事父、遠之事君、多識於鳥獸、艸木之名、推之從政、專對無不可者、其所謂係亦大矣、若作者能以思無邪存心、而不墮於奇怪浮靡之失、則聖人之所不棄也、其

者は其詞躁し、寬裕なる者は其詞平に、端靖なる者は其詞雅に、疏曠なる者は其詞逸す、雄偉なる者は其詞壯に、醞藉なる者は其詞婉なり、性情を涵養して、氣に發し言に形はる、此れ詩の本源なり。

唐書に曰、建安の後、詩律屢變す、沉約に至りて、音韻を以て相婉付す、宋之問、沉佺期に及び、又靡麗を加へ、句、聲病を忌む、錦綉の文を成すが如し、學者之れを宗とす。

羌堯章が曰、問ふ前輩の謂く、人工に畫に工なる者は、皆謂ふ物を玩へば志を喪ふと、嵇康が鍊鍛、阮孚が蠟屐と、虚く精神を費す、世に補ひなし、今の詩に工なる、此れに類すること非ざるを得んや、范氏が曰、夫子詩を刪て、六經に列ぬ、謂く其れ以て興る可く、以て觀る可く、以て群す可く、以て怨む可し、邇くは父に事へ、遠くは君に事へ、多く鳥獸、草木の名を識る、之れを推して政に従ひ、專り對ふるに不可なる者なし、其關係する所亦大なり、若し作者能く思無邪を以て心に存し、而して奇怪浮靡の失に墮らざるば、則聖人の棄てざる所なり、其れ或は聖

或於聖學之正教、漫不知講、而惟詩是務、則志荒之罪、亦固不得辭、而其人其詩、亦可知矣。

律詩難於古詩、絕句難於律詩、七言律詩難於五言律詩、五言絕句難於七言絕句、唯深於詩者知之。澹浪詩話

白樂天與元九書曰、夫文尙矣、三才各有文、天之文、三光首之、地之文、五材首之、人之文、六經首之、就六經言、詩又首之、何者、聖人感人心、天下和平、感人心者、莫先乎情、莫始乎言、莫切乎聲、莫深乎義、詩者、根情、苗言、華聲、實義、上自賢聖、下至愚騷、微及豚魚、幽及鬼神、羣分而氣同、形異而情一、未有聲入而不應、情交而不感者、聖人知其然、因其言、經之

學の正教に於て、漫として講ずることを知らず、而惟詩のみ是れ務めば、則志荒むの罪亦固に辭することを得ず、而して其人其詩亦知るべし。

律詩は古詩より難く、絶句は律詩より難く、七言律詩は五言律詩より難く、五言絶句は七言絶句より難し、唯、詩に深き者之れを知らん。澹浪詩話

白樂天、元九に與ふる書に曰、夫れ文尙し、三才各有文あり、天の文は三光之れを首とす、地の文は五材之れを首とす、人の文は六經之れを首とす、六經に就て言へば、詩又之れを首とす、何んとなれば、聖人人の心を感じて、天下和平なり、人の心を感じる者は、情より先なるは莫く、言より始なるは莫く、聲より切なるは莫く、義より深きは莫し、詩は情を根にし、言を苗にし、聲を華にし、義を實にす、上賢聖より下愚騷に至り、微豚魚に及び、幽鬼神に及び、群分れて氣同じ、形異にして情一なり、未だ聲入りて應ぜず、情交りて感ぜざる者はあらず、聖人其然るを知る、其言に因りて、之を經にするに六義を以てし、其辭に

以六義、緣其聲、緯之以五音、音有韻、義有類、韻協則言順、言順則聲易入、類舉則情見、情見則感易交、於是乎孕大含深、貫微洞密、上下通而一氣、奏憂樂合而百志熙、五帝三王所以直道而行、垂拱而理者、揭此以爲大柄、決此以爲大寶也、故開元首明股肱良之歌、則知虞道昌矣、聞五子洛汭之歌、則知夏政荒矣、言者無罪、聞者作戒、言者聞者莫不兩盡其心焉、洎周衰、秦興、採詩官廢、上不以詩補察時政、下不以歌洩導人情、乃至於詔成之風動、救失之道缺、于時六義始刊矣、國風變爲騷辭、五言始於蘇李、蘇李騷人皆不遇者、各繫其志、發而爲文、故河梁之句止於傷別、澤畔之吟歸于怨思、彷徨抑鬱、不暇及他

緣りて之れを緯にするに五音を以てす、音に韻あり、義に類あり、韻協ふときは則言順ふ、言順ふときは則聲入り易く、類舉ぐるときは則情見る、情見るときは則感交り易し、是に於てか大を孕み深きを含み、微を貫き密を洞す、上下通じて一氣奏なり、憂樂合して百志熙し、五帝三王道を直ふして行ひ、拱を垂れて理まる所以は、此れを掲げて以て大柄と爲し、此れを決して以て大寶と爲す、故に「元首明に股肱良し」といふの歌を聞ては則虞道の昌なるを知る、五子洛汭の歌を聞ては則夏の政荒むを知る、言ふ者は罪なく、聞く者戒と作す、言ふ者聞く者兩ながら其心を盡さずといふことなし、周衰へ秦興るに洎んで、採詩の官廢す、上詩を以て時の政を補察せず、下歌を以て人情を洩導せず、乃詔成の風動て、救失の遺缺くるに至る、時に六義始めて刊す、國風變じて騷辭と爲る、五言は蘇李に始まる、蘇李は騷人にして皆遇ざる者なり、各其志を繫けて發して文を爲る、故に河梁の句は傷別に止まり、澤畔の吟は怨思に歸す、彷徨抑鬱して他

耳然去詩未遠、梗槩尙存故與離別、則引雙鳥一鴈爲喻、諷君子小人、則引香艸惡鳥爲比、雖義類不具、猶得風人之什二三焉、于時六義始缺矣、晉宋已遺得者蓋寡、以康樂之奧博、多溺於山水、以淵明之高古、偏放於田園、江鮑之流、又狹於此、如梁鴻五噫之例者、百無一二焉、于時六義寢微、陵夷至于梁陳間、率不過嘲風雲、弄花草而已、噫、風雪花艸之物、三百篇中豈捨之乎、顧所用何如耳、設如北風其涼、假風以刺威虐也、雨雪霏霏、因雪以感征役也、棠棣之華、感華以諷兄弟也、采采芣苢、美艸以樂有子也、皆興發於此、而義歸於彼、反是者可乎哉、然則餘霞散戊、綺澄江淨如練、離花先委露、別葉乍辭風之什、

に及ぶに暇あらざるのみ、然れども詩を去ること未だ遠からず、梗概尙存せり、故に離別を興するときは、則雙鳥一鴈を引て喩と爲す、君子小人に諷するときは、則香草惡鳥を引て比と爲す、義類具らずと雖、猶風人の什が二三を得たり、時に六義始めて缺けぬ、晉宋より已遺得たる者蓋寡し、康樂が奧博を以て、多く山水に溺る、淵明の高古を以て、偏に田園に放なり、江鮑が流又此より狹し、梁鴻五噫の例の如き者、百にして、一になし、時に六義寢微なり、陵夷して、梁陳の間に至りて、率ね風雲を嘲り花草を弄ぶに過ぎざるのみ、噫、風雪花艸の物三百篇の中に、豈之れを捨てんや、顧に用ふる所何如のみ、設へば北風其れ涼たり、風を假りて以て威虐を刺る、雪雨る霏々たり、雪に因て以て征役を感む、棠棣の華は華に感じて以て兄弟を諷す、采苢を采るは草を羨みして以て子あるを樂むが如き、皆興此より發して、而して義彼に歸す、是に反く者可ならんや、然れば則餘霞散じて綺と成る、澄江淨ふして練の如し、離花先づ露に委し、

麗則麗矣、吾不知其所諷焉、故僕所謂嘲風雲弄花艸而已、于時六義盡去矣、唐興二百年、其間詩人不可勝數、所可舉者陳子昂有感遇詩二十首、鮑鮪有感興詩十五首、又詩之豪者、世稱李杜、李杜之作、才已奇矣、人不逮矣、索其風雅比興、十無一焉。

顏氏家訓曰、學問有利鈍、文章有巧拙、鈍學累功、不妨精熟、拙文研思、終歸蚩鄙、但成學士、自足爲人、必乏天才、勿強操筆、吾見世人至於無才、思自謂清華、流布醜拙、亦以衆矣、江南號爲詩街、力正反、自癡符、街賣也。

杜子美詩、文章一小技、於道未爲尊。

湯東澗談詩詩云、文章於道未爲尊、詩在文章又一塵、偶有好音來過耳、不須抵死要驚

〔別葉乍に風を辭す〕の什、麗しきことは則麗し、吾其諷する所を知らず、故に僕が謂はゆる風雲を嘲り花艸を弄ぶのみ時に六義盡く去る、唐興りて二百年、其間詩人勝けて數ふ可からず、舉ぐ可き所の者は陳子昂に感遇の詩二十首あり、鮑鮪に感興の詩十五首あり、又詩の豪なる者、世に李杜を稱す、李杜の作は才已に奇なり、人逮ばず、其風雅比興を索むれば、十に一もなし。

顏氏家訓に曰、學問に利鈍あり、文章に巧拙あり、鈍學功を累ねて精熟を妨げず、拙文思を研いて終に蚩鄙に歸す、但學士と成らば、自ら人と爲るに足れり、必、天才乏しくば強いて筆を操る勿れ、吾れ見る世人才思無くして自ら精華と謂ひ、醜拙を流布するに至ること、亦以て衆し、江南號して詩街、力正の反、自ら癡符と爲す、街ひ賣るなり。

杜子美が詩に、文章は一小技、道に於て未だ尊しと爲さず。

湯東澗が詩を談する詩に云、文章は道に於て未だ尊しと爲さず、詩は文章に在りて又一塵、偶、好音の來りて耳に過ぐるあり、須ひず死に抵るまで人を驚かすを要する

人。

或問詩可學否、伊川程子曰、既學時須是用功、方合詩人格、既用功、甚妨事、古人詩云、吟成五個字、用破一身心、又謂可惜一身心、用在五字上、此言甚當、某素不作詩、亦非是、禁止不作、但不欲爲此閑言語、且如今言能詩、無如杜甫、如云、穿花蛺蝶深深見、點水蜻蜓款款飛、如是閑言語、道出做甚、某所以不嘗作詩。

○古詩第二

四言古詩、古詩三百五篇、大率以四言成篇、其他三言、五言、六言、七言、八言、九言、則皆間見雜出、不以成章、況成篇乎、是詩以四言爲主也、其三言詩自漢始、文體明辨

ことをと。

成ひと問ふ詩學ふ可きや、否や、伊川の程子の曰、既に學ぶ時須らく是れ功を用ふべし、方に詩人の格に合ふ、既に功を用ふれば甚事を妨ぐ、古人の詩に云ふ、五個の字を吟し成して、一生の心を用ひ破ると、又謂ふ、惜む可し一生の心用ひて五字の上に在ることと、此の言甚當れり、某素と詩を作らず、亦是れ禁止して作らざるに非ず、但此の閑言語を爲すことを欲せず、且如今詩を能くすと云ふもの、杜甫に如くはなし、花を穿つ、蛺蝶深々として見へ、水に點する、蜻蜓款々として飛ぶと云ふが如き、是の如きの閑言語道ひ出たして甚をか做さん、某嘗て詩を作らざる所以なり。

○古詩第二

四言古詩、古詩三百五篇、大率四言を以て篇を成す、其他三言、五言、六言、七言、八言、九言は、則皆間見へ雜り出づ、以て章を成さず、況や篇を成さんや、是れ詩は四言を以て主と爲すなり、其の三言の詩は漢より始まる、文體明辨

五言古詩體式、五言古詩、不拘平仄、不定對偶、或隨賦比興起、須要寓意源遠、托辭溫厚、反覆優遊、雍容不迫、或感古懷今、或懷人傷己、或瀟灑間適、寫景要雅、淡推人心之至情、懷感慨之微意、悲慨含蓄而不傷、美刺婉曲而不露、要有三百篇之微意也。詩法入門

冰川詩式曰、學五言古詩、須將古詩十九首、熟讀玩味、方得旨趣、又曰、五言古詩、雖無定句、十九首尙矣、然自六句短古篇、放之至百句、○篤信案、五言古詩、自蘇武李陵而始、凡五言古詩、不拘于聲律與對偶、只押韻而已、又有偶然而對偶者、其押韻或用仄韻、或有通用於數韻者、又有單句下不拘平仄者、如古詩十九首第九、一首中用歌韻支韻微韻

五言古詩の體式 五言の古詩は、平仄に拘らず、對偶を定めず、或は賦比興に隨ひて起す、須らく意を寓すること源遠く、辭を托すること溫厚に、反覆優遊、雍容として迫らざることを要すべし、或は古を感じ今を懷ひ、或は人を懷ひ己を傷み、或は瀟灑間適、景を寫すこと雅淡ならんことを要す、人心の至情を推し、感慨の微意を懷ふ、悲慨含蓄して、而して傷らず、美刺婉曲にして、而して露さず、三百篇の微意あらんことを要するなり。詩法入門

冰川詩式に曰、五言古詩を學ぶには、須らく古詩十九首を將て熟讀玩味すべし、方に旨趣を得ん、又曰、五言古詩、定句なしと雖、十九首尙し、然して六句短古篇より、之を放て百句に至る、○篤信案するに、五言古詩は蘇武李陵よりして始まる、凡五言古詩、聲律と對偶とに拘はらず、只韻を押すのみ、又偶然として對偶する者あり、其韻を押す、或は仄韻を用ひ、或は數韻を通用する者あり、又單句の下平仄に拘はらざる者あり、古詩十九首の第九の如き、一首の中に、歌韻支韻微韻を用ひて押と爲す、又魚虞通用するあり、古詩六句の詩多し、七言古詩の法、亦五言に同じ、七言古詩は、張衡が四愁の詩より來りて、柏梁の

爲押、又有魚虞通用、古詩多六句詩、七言古詩之法亦同于五言、七言古詩從張衡四愁詩來變柏梁體耳、至盛唐作者始盛。

海虞吳訥曰、世傳七言古詩起於漢武柏梁臺體、按古文苑云、元封三年詔羣臣能七言者上臺侍坐、武帝賦首句曰、日月星辰和四海、梁王襄繼之曰、騶駕駟馬從梁來、自襄而下作者二十四人、至東方朔而止、每人一句、句皆有韻、通二十五句、共出一韻、蓋如後人聯句、而無隻句與不對偶也。

古風書式、古風者稍異古詩、亦可用長短句也、不同排律拘平仄、律詩定對偶、用韻或長篇到底一韻、或數句一換、但要句法蒼老、意極高古、不落時經、此律詩熟後、學問廣博

體を變ずるのみ、盛唐に至りて作者始めて盛んなり。

海虞吳訥が曰、世に傳ふ七言古詩は、漢武柏梁臺の體に起ると、按ずるに古文苑に云ふ、元封三年、群臣の七言を能くする者に詔して臺に上り侍坐せしむ、武帝首句を賦して曰、日月星辰四海を和すと、梁王襄之れに繼ぎ曰、騶駕駟馬梁より來ると、襄より而下作者二十四人、東方朔に至りて止まる、人ごとに一句、句皆韻あり、二十五句を通じて共に一韻に出づ、蓋、後人の聯句の如くにして、而して隻句なきと、對偶せざるとなり。

古風體式、古風とは、稍古詩に異なり、亦長短の句を用ふ可し、排律の平仄に拘はり、律詩の對偶を定るに同じからず、韻を用ふること或は長篇、到底一韻、或は數句一たび換ふ、但、句法蒼老、意極めて高古にして、時經に落ちざらんことを要す、此れ律詩熟して後、學問廣博、情思

情思超邁、方可爲之。詩法入門

古詩有一韻兩用者、文選曹子建美女篇有兩難字、古詩有一韻三用者、文選任彥昇、范僕射、三用情字是也、有古詩三韻六七用者、有古詩重用二十許韻者、有古詩旁取六七韻者、韓退之此日足可惜篇是也、凡雜用東冬江陽庚青六韻、兼滄浪

古詩有全不押韻、如采蓮曲是也、

古詩尤長者、漢末建安時人、爲焦仲卿妻作、

評曰、是古今第一首長詩、文體文辨

五言長韻古詩、如白樂天遊悟真寺詩、一百

韻、真絕也、楊誠齋

夫詩之有律猶文之有駢儷、終是俳體、古人決不屑此、未論三百篇、只如枚乘阮藉陶淵

超邁にして、方に之れを爲すべし、詩法入門

古詩一韻兩たび用ふる者あり、文選曹子建が美女の篇に、兩の難の字あり、古詩一韻三たび用ふる者あり、文選任彥昇の范僕射を哭する、三たび情の字を用ふる是なり、古詩三韻六七用ふる者あり、古詩二十許韻を重ね用ふる者あり、古詩旁く六七韻を取る者あり、韓退之此の日惜む可きに足れりの篇是なり、凡そ東冬江陽庚青六韻を雜へ用ひたり。兼滄浪

古詩、全く韻を押さざるあり、采蓮の曲の如きはなり、

古詩尤長者は、漢の末建安の時の人、焦仲卿が妻の爲に作る。評に曰、是れ古今第一首の長詩と、文體明辨

五言長韻の古詩、白樂天が悟真寺に遊ぶ詩の如き、一百韻、真に絶れたり。楊誠齋

夫れ詩の律ある、猶文の駢儷あるがごとし、終にはれ俳體、古人決して此れを屑とせず、未だ三百篇を論ぜず、只枚乘阮藉陶淵明が如き、皆涵蓋して餘味あり、亦天真を

明、皆涵蓄有餘味、亦可陶天真也。魏莊棗

歌行之體、律詩拘於聲律、古詩拘於語句、以是詞不能達、夫謂之行者達其詞而已、如古文而有韻、自陳子昂一變江左之體、而歌行暴于世、行者詞之遺無所留礙、如雲行水行、曲折容洩、不爲聲律語句之所拘、但於古詩句法中、得增詞語耳。師民

五言長篇古詩、分段過脈、回照贊歎、凡作一篇、先分爲幾段、幾節、每節句數多少、略均齊、前段是敘子、敘子通篇之意、皆含其中、結段要照前段、如選詩、分段甚均、竝不參差、杜卻不甚如此、太拘、然亦不太長、不太短也。○次要過句爲血脈、引過此段、過處用二句、一結上一生下、爲最緊、非老手未易能之。

陶子可し。魏莊棗

歌行之體、律詩は聲律に拘り、古詩は語句に拘る。是を以て詞達すること能はず、夫れ之れを行と謂ふは、其詞を達するのみ、古文にして韻あるが如し、陳子昂、江左の體を一變してより、而して歌行世に暴る、行は詞の違る、留礙する所なし、雲行き水行きて、曲折容洩するが如し、聲律語句の爲に拘せられず、但し古詩句法の中に於て、詞語を増すことを得るのみ。師民

五言長篇の古詩、分段過脈、回照贊歎、凡一篇を作る、先づ分つて幾段幾節と爲し、每節句數多少、略均齊ならんことを要す、前段は是れ敘子、敘子は通篇の意、皆其中に含む、結段は前段を照さんとを要す、選詩の如き、分段甚均し、竝に參差せず、杜は卻て甚此の如く、太拘はらず、然も亦太長からず、太短からず。○次に過句、血脈を爲さんことを要す、此段を引過して、過處二句を用ふ、一は上を結び、一は下を生ず、最緊と爲す、老手に非ずんば、未だ之を能くし易からず。○回照、十歩に一たび首を回らし、

○回照、十歩一回、首要照題目、五歩一消息、要聞語、○贊歎、方不甚結、感長篇、怕雜亂、一意爲一段、已上四法備見北征詩、舉一隅之道也。學範、下同。

五言短古篇法、詞簡意味長、言語不可分明說盡、含糊則有餘味、○楊仲弘曰、五言短古、衆賢皆不知來處、乃只是選詩結尾四句、所以含蓄無限意、自然悠長、昔人詩樣、步出城西門、悵望江南路、前日風雪中、故人從此去。

七言長篇古風、分段、過段、突兀、字貫、讚歎、再起、歸題、送尾、分段如五言、過段亦如之、稍有異者、突兀不用過句、陡頓便說他事、岑參專高此法、字貫、前後重三疊四用

初學詩法

題目を照さんことを要す、五歩に一たび消息し、語を問へんことを要す。○贊歎は方に甚結感せず、長篇は雜亂を怕る、一意を一段と爲す、已上の四法、備さに北征の詩に見へたり、一隅を舉るの道なり。學範、下同。

五言短古篇の法、詞簡に意味長く、言語分明に説き盡くす可らず、含糊すれば則餘味あり、○楊仲弘が曰、五言短古、衆賢皆來處を知らず、乃只是れ選詩結尾の四句、限りなき意を含蓄して、自然に悠長なる所以、昔人の詩樣、步して城西門を出て、悵望す江南の路、前日風雪の中、故人此れより去る。

七言長篇の古風、分段、過段、突兀、字貫、讚歎、再起、歸題、送尾、分段は五言の如し、過段も亦之の如くにして稍、異なる者あり、突兀は過句を用ひず、陡頓に便ち他事を説く、岑參專此法を高しとす、字貫は前後重三疊四、兩三字を用ひて、貫く、極て精好、岑參が長せる所、讚歎は五言

兩三字貫、極精好、岑參所長、讚歎同五言、有從容意思、再起且如一篇三段、說了前事、再提起從頭說、反覆有情、如魏將軍歌、松子障歌、歸題、乃本末一二句徹上起句、又謂之顧首、如蜀道難、古離別、洗兵馬、送尾、則生一段餘意、結末或反用、或比諭用、如墜馬歌、君不見嵇康養、生被殺戮、又曰如何不飲令心哀、學範

七言短古篇法、詞明意盡、與五言相反、昔人詩樣、休洗紅、洗紅紅色變、不惜故縫衣、記得初按茜、人命百年能幾何、後來新婦今爲婆、石人前石橋邊、六角黃牛二頃田、帶經躬耕三十年、學範

樂府、漢成帝定郊祀、立樂府、採齊楚趙魏之

に同じ從容の意思あり「再起は且一篇三段の如く、前事を説き了りて、再び提起起して頭より説く、反覆情あり、魏將軍が歌、松子障が歌の如し、歸題は乃本末一二句上に徹し句を起す又之れを顧首と謂ふ、蜀道難、古離別、洗兵馬の如し、送尾は、則一段の餘意を生ず、結末或は反して用ひ、或は比諭して用ふ、墜馬の歌に、君見ずや嵇康が生を養しも殺戮せられたり、又曰「如何ぞ飲まずして心をして哀ましむる」と云ふが如し。學範

七言短古篇の法、詞明に意盡く、五言と相反す、昔人の詩樣、「紅を洗ふことを休めよ、紅を洗へば紅色變す、故縫衣を惜まず、記得す初め茜を按せしことを、人命百年能く幾何ぞ、後來の新婦今妻と爲る、石人の前石橋の邊、六角の黃牛二頃の田、繩を帯びて躬ら耕す三十年」學範

樂府は漢の成帝郊祀を定め樂府を立つ、齊楚趙魏の聲を

聲、以入樂府、以其音羽可被於絃歌也。宋嚴羽儀
詩話 滄浪

樂府體式、古樂府音調有法、聲詞有律、以質古簡奧、氣格蒼峻而聲韻鏘然、然卽事命題、名寔多種、曰歌、曰行、曰吟、曰辭、曰曲、曰篇、曰詠、曰謠、曰嘆、曰哀、曰怨、曰別、皆樂府之流派也、乃詩之變體也、而總謂之樂府。入詩法 ○學範曰、樂府每要麤、多用俚語、而文采之妙矣、如焦仲卿妻、木蘭詞、羽林郎、霍家妹、三婦詞、大垂手、小垂手等篇、皆絕唱。

篤信曰、古人之作詩、特是言其志而已、未有以藻麗紛華爲工、然而和順積中、英華發外者、自然爲華藻文雅而已、如後世律詩、拘對偶泥聲律、皆是安排強作、非言志

初學詩法

採りて、以て樂府に入る、其音羽にして、絃歌に被らしむ可きを以てなり。宋嚴羽儀解
滄浪詩話

樂府體式、古樂府は音調法あり、聲詞律あり、質古簡奥なるを以て、氣格蒼峻にして、而して聲韻鏘然たり、然して事に即き題を命じて名寔種多し、曰歌、曰行、曰吟、曰辭、曰曲、曰篇、曰詠、曰謠、曰嘆、曰哀、曰怨、曰別、皆樂府の流派なり、乃詩の變體なり、而して總て之れを樂府といふ。入詩法 ○學範に曰、樂府は毎に麤なることを要す、多く俚語を用ひて、而して、文采の妙あり、焦仲卿が妻、木蘭の詞、羽林郎、霍家妹、三婦の詞、大垂手、小垂手等の篇の如き、皆絶唱なり。

篤信が曰、古人の詩を作る、特に是れ其志を言ふのみ、未だ藻麗紛華を以て工と爲すこと行らず、然れども和順中に積んで、英華外に發する者、自然に華藻文雅と爲るのみ、後世律詩、對偶に拘り、聲律に泥むが如き、皆是れ安排強作、志を言ふ者の爲す所に非ず、其の古

者之所爲、其去古人風雅之正也甚遠矣、唯古詩不拘對偶聲律、多言其情實者、所以爲近古也、故作詩者、當以古詩爲本、我邦古今作律詩者甚多、而古詩之作歷世稀聞、可謂失風雅之正、豈不可歎乎。

○律詩第三排律附

近體律詩、按律詩者、梁陳以下聲律對偶之詩也、蓋自邶風有觀閔既多、受侮不少之句、其屬對已工、堯典有聲依永律和聲之語、其爲律已甚、梁陳諸家漸多、儷句、雖名古詩、實墮律體、唐興沉宋之流、研練精切、穩順聲勢、號爲律詩、其後寢盛、雖不及古詩之高遠、然對偶音律亦文章之不可缺者、文體明辨、對偶亦文勢之所必然、亦何惡於聲律哉、詩

人風雅の正を去ること甚遠し、唯古詩對偶聲律に拘らず其情實を言ふ者多し、古に近しと爲す所以なり、故に詩を作る者、當さに古詩を以て本とすべし、我邦古今律詩を作る者甚多し、而して古詩の作、世を歴て聞くこと稀れなり、風雅の正を失ふと謂ふべし、豈歎す可からざらんや。

○律詩第三排律附

近體律詩、按するに律詩は、梁陳より以下聲律對偶の詩なり、蓋邶風に「閔を觀ると既に多く、侮を受くると少からず」の句あり、其屬對已に工なり、堯典に「聲は永きに依り、律は聲を和らぐ」の語あり、其律たる已に甚し、梁陳の諸家漸く儷句多し、古詩と名づく、雖實は律體に墮つ、唐興りて沉宋が流ひ研練精切、穩順聲勢、號して律詩と爲す、其後寢く盛なり、古詩の高遠に及ばず、雖然も偶音律も亦文章の缺く可からざる者なり、文體明辨、對偶も亦文勢の必然なる所、亦何ぞ聲律を惡まんや、詩

法源流

五言七言八句、有對偶音律、謂之律詩。詩法

源流

律詩、有起承轉合之四字、一二句爲起、名起聯、又名破題、又名發句、三四爲承、名領聯、又名胸句、五六爲轉、名頸聯、又名腰句、七八爲合、名尾聯、又名結句、或名落句、出于文體明辨及冰川詩式

凡律詩二句爲一聯、起結不對、惟中間二聯用對。

律詩有歸結不對、領頸二聯對、有起聯不對、後三聯對、有結聯不對、前三聯對、有八句全對、有八句竝不對、又有前二聯隔句對者、謂之扇對格。

初學詩法

法源流

五言七言八句、對偶音律ある、之れを律詩と謂ふ。詩法源流

律詩に、起承轉合の四字あり、一二の句を起と爲し、起聯と名づけ、又破題と名づけ、又發句と名づく、三四を承と爲し、領聯と名づけ、又胸句と名づく、五六を轉と爲し、頸聯と名づけ、又腰句と名く、七八を合と爲し、尾聯と名づけ、又結句と名づけ、又落句と名づく、文體明辨及冰川詩式に出づ、

凡律詩二句を一聯と爲し、起結對せず、惟中間二聯對を用ふ。

律詩起結對せず、領頸の二聯對するあり、起聯對せず、後の三聯對するあり、結聯對せず、前の三聯對するあり、八句全く對するあり、八句竝に對せざるあり、又前の二聯句を隔てて對する者あり、之れを扇對の格と謂ふ。

律詩、須情中有景、景中有情、以事爲意、以意融事情、意迭出、事意貫通、方爲近體之妙、冰

川詩式

七言律詩、難於五言律詩、七言下字較虛實、五言下字較細嫩、若七言可截作五言、便不成詩、冰川詩式

楊載曰、律詩破題、或對景興起、或比起、或引事起、或就題起、要突兀高遠、如狂風捲浪勢欲滔天、領聯或寫意、或寫景、或書事、或用事引證、此聯要接破題、如驪龍之抱珠而不脫、頸聯或寫意、寫景、書事、用事、引證、與前聯之意相應相避、要變化、如疾雷破山、觀者驚愕、結句或就題結、或開一步、或綴前聯之意、或用事必放一步、作散場、如剡溪之棹

律詩は須く情中に景あり、景中に情あるべし、事を以て意と爲し、意を以て事を融す、情意迭ひに出で、事意貫通す、方に近體の妙と爲す、冰川詩式

七言律詩は、五言律詩より難し、七言は字を下すこと較、虛實、五言は字を下すこと較、細嫩、七言截て五言と作す可きが若きは、便ち詩を成さず、冰川詩式

楊載が曰、律詩破題、或は景に對して興起し、或は比起し、或は事を引て起し、或は題に就て起す、突兀高遠にして狂風の浪を捲き勢天に滔らんと欲るが如くならんを要す、領聯或は意を寫し、或は景を寫し、或は事を書し、或は事を用ひて引證す、此聯破題に接して驪龍の珠を抱きて脱せざる如くならんを要す、頸聯或は意を寫し、景を寫し、事を書し、事を用ひて、引證す、前聯の意と相應じ相避く、變化すること、疾雷の山を破り、觀る者驚愕するが如くならんを要す、結句或は題に就て結び、或は一步を開き、或は前聯の意を綴し、或は事を用ひ、必一步を放ちて散場と作す、剡溪の棹自ら去り自ら回るが如し、言

自去自回、言有盡而意無窮。

律詩體格、若語其難易、則對句易、工、結句難、工、發句尤難、工、七言視、五言爲難、五言不可加、七言不可減、爲、猶難、句要藏、字、字要藏、意、如、連珠、不斷、方妙、詩法入門

調言長語曰、三體唐詩有實接、虛接、用事、前後對等目、謝疊山點文章軌範、有放膽、小心、幾字句等法、竊恐當時作詩文時、遇景得情、任意落筆、而自不離於規矩、爾若夫拘束、要作其體字樣、非發乎性情、風行水上之旨。

律詩、有四實、四虛、前實、後虛、前虛、後實之別、實爲景、虛爲情、四實者、中四句皆景物而實、四虛者、中四句皆情思而虛、前實後虛者、前聯景而實、後聯情而虛、前虛後實者、前聯情

盡ることありて意窮まりなし。

律詩體格、若し其難易を語れば、則對句工なり易く、結句工なり難く、發句尤工なり難し、七言は五言に視ふるに難しと爲す、五言加ふ可からず、七言減ず可からず、猶難しと爲す、句は字を藏せんことを要し、字は意を藏せんことを要す、連珠の斷えざるが如し、方に妙なり、詩法入門、調言長語に曰、三體唐詩に、實接、虛接、用事、前後對等の目あり、謝疊山文章軌範を點する、放膽、小心、幾字句等の法あり、竊に恐らくは當時詩文を作る時、景に遇ふて情を得、意に任せて筆を落して、而して自ら規矩を離れざるのみ、若し夫れ拘束して其體の字樣を作らんと要せば、情に發して、風、水上を行くの旨に非ず。

律詩に、四實、四虛、前實後虛、前虛後實の別あり、實を景と爲し、虛を情と爲す、四實は、中の四句皆景物にして實、四虛は中の四句皆情思にして虛、前實後虛は、前聯景にして實、後聯情にして虛、前虛後實は、前聯情にして虛、後

而虛、後聯景而實冰川詩式、下同、前開後合格、前四句言昔時、開也、後四句言今日之事、合也。

一意格、自首聯、以至末聯、一句生一句、而全篇旨趣如行雲流水。

兩句一意法、又謂之流水句、五言卽十字句法、宜于領聯用之、太白詩如何青艸裡、也有白頭翁、又七言卽十四字法、亦宜于領聯用之、杜牧詩塵世難逢開口笑、菊花須插滿頭歸、是皆有對偶、又自攜瓶去沽村酒、卻著衫來作主人。

一句造意格、冰川詩式曰、首聯第一句、與起第二句、而第二句乃主意、中間二聯與結聯、皆言第二句意思、如杜甫江亭詩是也。

聯景にして實冰川詩式、下同、前開後合の格、前四句昔時を言ふ、開なり、後四句、今日の事を言ふ、合なり。

一意の格、首聯より、以て末聯に至るまで、一句は一句を生じ、而して全篇旨趣、行雲流水の如し。

兩句一意の法、又之れを流水の句と謂ふ、五言は卽十字の句法宜しく領聯に于いて之れを用ふべし、太白が詩に「如何ぞ青艸の裡（ま）也白頭の翁あり」と、又七言は卽十四字の法、亦宜しく領聯に于いて之れを用ふべく、杜牧が詩に「塵世口を開きて笑ふに逢ひ難し、菊花須く滿頭に挿んで歸るべし」と、是れ皆對偶あり、又「自ら瓶を携へ去りて村酒を沽ひ、卻て衫を著け來りて主人と作る」

一句造意の格、冰川詩式に曰、首聯第一句、第二句を興起して、而して第二句乃ち主意、中間二聯と結聯と皆第二句の意思を言ふ、杜甫江亭の詩の如きはなり。

律詩有儷春格、首二句先對、領聯卻不對、如梅花儷春色、而先開、如黃鶴樓詩是也。

五言律仄韻唐人作最少。冰川詩式

蜂腰詩體式、凡律詩領聯不對、卻以二句敘一事、而意與首二句相貫、至頸聯方對者、謂之蜂腰體、言已斷而復續也。詩法入門

排律、按、排律原於顏延之謝瞻諸人、梁陳以

還儷句尤切、唐興始專此體、而有排律之名、

大抵排律之體、不以鍛鍊爲工、而以布置有

序、首尾通貫爲尙、學者詳之、文體○排律體

式、排律者、唐興始有此體、用此律試士、其

對偶平仄與律詩同、其起止照應與長篇古

風同、于八句律詩之外、任意鋪排、聯句多寡

不拘、不以鍛鍊爲工、而以布置有序、首尾通

律詩儷春の格あり、首二句先づ對し、領聯卻て對せず、梅花、春色を儷んで先づ開くが如し、黃鶴樓の詩の如き是なり。

五言律の仄韻、唐人作ること最少し。冰川詩式

蜂腰詩體式、凡律詩領聯對せず、卻て二句を以て一事を敘す、而して意、首の二句と相貫き、頸聯に至りて方に對する者、之れを蜂腰體と謂ふ、言は已に斷えて復續ぐなり。詩法入門、

排律、按するに排律は顏延之謝瞻の諸人に原く、梁陳よ

り以て還儷句尤切なり、唐興りて始めて此の體を專にし、

而して排律の名あり、大抵排律の體は鍛鍊を以て工と爲

さず、而して布置序あり、首尾通貫するを以て尙しと爲す、

學者之れを詳にせよ、文體○排律體式、排律とは唐興

りて始めて此體あり、此律を用ひて士を試む、其對偶平

仄、律詩と同じ、其起止照應、長篇古風と同じ、八句律詩の

外に于て、恣に任せて鋪排す、句を聯る多寡拘はらず、鍛鍊を以て工と爲さずして、而して布置序あり、首尾通貫

貫爲尙、詩法入門○篤信案、排律、是長篇之律詩也、多是五言、十句以上、至于百句、又有百句以上者、其間有十二句、十四句、十六句、二十句、二十四句、二十八句、四十句者、除發句落句之外、竝有對、其聲律對偶與律詩同。

冰川詩式曰、七言排律、唐人不多見、七言排律、貴音律和協、體製整齊、忌似古詩口氣。有律詩至百五十韻者、有律詩止三韻、唐人有六句五言律、嚴澹浪

○絕句第四

絕句詩原於樂府、下及六代、述作漸繁、唐初穩順聲勢、定爲絕句、絕之爲言、截也、卽律詩而截之也、故凡後兩句對者是截、前四句、前兩句對者是截、後四句、全篇皆對者、是截中

するを以て尙しと爲す、詩法入門○篤信按するに排律は是長篇の律詩なり、多くは是五言、十句以上、百句に至る、又百句以上なる者あり、其間十二句、十四句、十六句、二十句、二十四句、二十八句、四十句なる者あり、發句落句を除くの外、竝に對あり、其聲律對偶律詩と同じ。

冰川詩式に曰、七言排律、唐人多く見ず、七言排律は音律和協し體製整齊なるを貴ぶ古詩の口氣に似たることを忌む。

律詩百五十韻に至る者あり、律詩止三韻三なるあり、唐人六句五言律あり、嚴澹浪

○絕句第四

絶句の詩は樂府に原き、下六代に及んで述作漸く繁し、唐の初め、聲勢に穩順なるを定めて絶句と爲す、絶の言たる截なり、律詩に卽て之れを截つ、故に後の兩句對する者は是れ前の四句を截つ、前の兩句對する者は是れ後の四句を截つ、全篇皆對する者は、是れ中の四句を截つ、

四句皆不對者是截首尾四句故唐人絕句皆稱律詩觀李漢編昌黎集絕句皆入律詩蓋可見矣大抵絕句詩以第三句爲主須以實事寓意則轉換有力旨趣深長雖以杜少陵之聖於詩而於此尙有遺憾則此體豈可易而爲之哉

文體明辨

楊慎曰予嘗品唐人之詩樂府本效古體而意反近絕句本自近體而意實遠欲求風雅之仿佛者莫如絕句唐人之所偏長獨至而後人力追莫嗣者也

楊載曰絕句之法要婉曲回環刪蕪就簡句絕而意不絕多以第三句爲主而第四句發之有實接有虛接承接之間開與合相關反與正相依順與逆相應一呼一吸宮商自諧

皆對せざる者は是れ首尾の四句を截つ故に唐人絶句皆律詩と稱す李漢が昌黎集を編するを觀るに絶句は皆律詩に入る蓋見つ可し大抵絶句の詩第三句を以て主と爲す須く實事を以て意を寓すべし則轉換力ありて旨趣深長なり杜少陵が詩に聖なるを以てすと雖而して此に於て尙遺憾あるときは則此體豈易く之れを爲すべけんや

文體明辨

楊慎が曰予嘗唐人の詩を品するに樂府本と古體に效て而して意反て近く絶句本と近體よりして意實に遠し風雅の仿佛を求めんと欲する者絶句に如くはなし唐人の偏に長し獨至る所にして而して後人力め追ふて嗣ぐこと莫き者なり

楊載が曰絶句の法婉曲回環蕪を刪り簡に就き句絶えて意絶えざることを要す多くは第三句を以て主と爲す而して第四句之れを發す實接あり虚接あり承接の間開と合と相關り反と正と相依り順と逆と相應す一呼一吸宮商自ら諧ふ

五七言絶句、有前對、有後對、有四句全對、有四句不對、有扇對、有四句四意、

五七言絶句、實接格、第三句以實事、接前二句、如杜牧江南春作是也。

虛接格、此法第三句以虛語接前二句、如張籍秋思詩、洛陽城裏見秋風、云云是也。

扇對、又謂之隔句對、絶句之第一句與第三句對、第二句與第四句對。

四異格、是四句四意也、如杜甫漫興詩是也、字應格、白居易絶句曰、臥枕一卷書、起嘗一杯酒、書將引昏睡、酒用扶衰朽、

雙尾格、篤信案三四句各一意、竝承一二句、王維別輞川詩云、依遲動車馬、惆悵出松蘿、忍別青山去、其如綠水何。

五七言絶句、前對あり、後對あり、四句全對あり、四句對せざるあり、扇對あり、四句四意あり。

五七言絶句、實接の格、第三句實事を以て、前の二句に接ぐ、杜牧が江南春の作の如きはなり。

虚接の格、此法第三句虚語を以て前の二句に接ぐ、張籍秋思の詩、洛陽城裏秋風を見る云云の如きはなり。

扇對、又之れを隔句對と謂ふ、絶句の第一句と第三句と對し、第二句と第四句と對す。

四異格、是れ四句四意なり、杜甫漫興の詩の如き、是なり、字應格、白居易の絶句に曰、臥しては一卷の書を枕にし、起ては一杯の酒を嘗む、書は將て昏睡を引き、酒は用て衰朽を扶くと。

雙尾格、篤信案するに、三四句各一意、竝に一二句を承く、王維が輞川に別る詩に云、依遲として車馬を動かし、惆悵して松蘿を出づ、忍んで青山に別れ去る、其れ綠水を如何せん」と。

下句釋上句格、以三四句釋一二句、如李
 白山中問答詩、是也。

拗體、周弼曰、此體必得奇句、時出而用之、
 ○冰川詩式、拗句換字法、或二四皆平、或仄、
 或六四皆平、或仄、或三字一連皆平、或仄、或
 當平處、以仄聲易之、○詩法入門云、律詩平
 仄不差、則不失粘、一失粘則爲拗體、或句拗
 字拗亦爲拗體、○篤信謂、用律之中與常體
 相拗戾、所以稱拗體也、○袁石公曰、五言絕
 句、貴拗體、七言絕句貴諧和。

○律詩絕句用韻法第五

陳西文詩法指南曰、一三五不論、謂詩句中
 第一字、第三五字、或用仄、或用平、不必拘、又
 曰二四六分明、謂第二字、第四六字、當用平

下句、上句釋する格、三四の句を以て一二の句を釋す、
 李白、山中問答の詩の如きはなり。

拗體、周弼が曰、此の體必奇句を得て、時に出して之れを
 用ふ、○冰川詩式に拗句換字の法、或は二四皆平、或は仄、
 或六四皆平、或は仄、或は三字一連皆平、或は仄、或は當
 に平なるべき處、仄聲を以て之れに易ふ、○詩法入門に
 云ふ、律詩平仄差はされば、則粘を失はず、一たび粘を失
 へば、則拗體と爲る、或は句拗字拗亦拗體と爲す、○篤信
 謂らく、律を用ふるの中、常の體と相拗戾す、拗體と稱す
 る所以なり、○袁石公が曰、五言絶句は、拗體を貴ぶ、七言
 絶句は諧和を貴ぶ。

○律詩絶句用韻法第五

陳西文が詩法指南に曰、一三五論せず、詩句の中第一字、
 第三五字、或は仄を用ひ、或は平を用ひ、必しも拘はらざ
 るを謂ふ、又曰二四六分明、第二字、第四六字、當さに平字
 を用ふべき者、一定に平を用ひ、當さに仄を用ふべき者

字者、一定用平、當用仄者一定用仄、不可移易。○篤信案七言詩、一三五不拘、平仄、五言詩、一三不拘、平仄、國俗之詩式、有二四不同、二六對、下三連、三五同、四仄一平、一三聲、一首同字、陷落、挾聲等之法、其中有與唐詩法合者、有不合者、不合者不要用之、二四不同、謂每句第二字與第四字不用同聲、二六對、謂第二字與第六字須用同聲、此二者與中華詩法同、下三連、謂每句忌下三字用連聲、考之唐詩、如絕句、下三連者極少、律詩、不必拘、中國古人之律詩、下三連者甚多、如杜子美題省中院壁詩、一首中亦有數句、三五同、謂忌第三字第五字同聲、而唐詩不必拘、四仄一平、五言詩忌之、而唐詩四仄一平、四平

一定に仄を用ひ、移し易ふ可からざるを謂ふ。○篤信案するに七言の詩、一三五平仄に拘はらず、五言の詩、一三平仄に拘はらず、國俗の詩式、二四不同、二六對、下三連、三五同、四仄一平、一三聲、一首同字、陷み落し、挾み聲等の法あり、其中唐詩の法と合する者あり、合はざる者あり、合せざる者は之れを用ふることを要せず、二四不同は每句第二字と第四字と同聲を用ひざるを謂ふ、二六對は、第二字と第六字と同聲を用ふべきことを謂ふ、此の二者は中華の詩法と同じ、下三連は、每句、下の三字連聲を用ふるとを忌むを謂ふ、之れを唐詩に考ふるに、絶句の如きは、下三連なる者極めて少なし、律詩は必しも拘はらず、中國古人の律詩、下三連なる者甚多し、杜子美省中の院壁に題する詩の如き、一首の中亦數句あり、三五同とは、第三字第五字同聲を忌むを謂ふ、而して唐詩必しも拘はらず、四仄一平は、五言の詩之れを忌む、而して唐詩四仄一平、四平一仄なる者太多し、拘はる可からず、一三聲とは、仄平仄仄平なる者を忌むを謂ふ、之れを唐詩に考

一仄者太多不可拘、二三聲謂忌仄平仄仄平者、考之唐詩不多見、一首同謂忌、一首之中用同字、考之唐詩用同字者甚多、宜不嫌蹈落謂首句末字不押平而用仄、挾聲考之中國論詩法書中未見之、然而中華古人絕句律詩竝用之者甚多、蓋謂當仄聲轉爲平、挾之兩仄之間、而每用句末如絕句、每在第三句、如律詩、每在第七句、如排律、每在落句之前句、律詩之中一三五句用挾聲者極少、如七言之句、第二字仄、則第五字用仄、而第六字轉爲平、是與二六對者不同、如五言、第二字平者、轉第三字之平而爲仄、變第四字之仄而爲平是也、如七言之句、第二字平者不用挾聲、唯第二字仄者用之、五言則第二

ふるに多く見ず、一首同とは、一首の中、同字を用ふるを忌むを謂ふ、之れを唐詩に考ふるに、同字を用ふる者甚多し、宜しく嫌はざるべし、蹈落とは、首句の末字平を押さずして仄を用ふるを謂ふ、挾聲は之れを中國の詩法を論ずる書中に考ふるに、未だ之れを見ず、然れども中華の古人絶句律詩竝に之れを用ふる者、甚多し、蓋當に仄聲なるべくして轉して平と爲し、之れを兩仄の間に挾むを謂ふ、而して毎に句の末に用ふ絶句の如きは毎に第三句に在り、律詩の如きは毎に第七句に在り、排律の如きは毎に落句の前に在り、律詩の中一三五句挾聲を用ふる者、極めて少し、七言の句の如き第二字な仄れば、則第五字仄を用ふ、而して第六字轉じて平と爲す、是二六對なる者と同じからず、五言の如き、第二字平なる者、第三字の平を轉じて仄と爲し、第四字の仄を變じて平と爲す是なり、七言の句の如き、第二字平なる者は挾聲を用ひず、唯第二字仄なる者之れを用ふ、五言は則第二字仄なる者は挾聲を用ひず、唯、第二字平なる者之れを用ふ、

字仄者不用。挾聲唯第二字平者用之。○如七言絕句正格第三句之第五字、唐詩必用平字、用仄者極少。○上句末用靜字、下句末用閑字、或上句末用意字、下句末用心字、或上句中用搖字、下句同位用撼字之類、竝不禁。

律詩及絕句首句之末用仄字亦可、倭俗謂之蹈落、前對詩多用之、又非前對而用之者亦甚多、須知首句末字不拘聲律。

五言絕句有、如押平聲首句押他平韻、朝日照紅粧、擬上銅雀臺、畫眉猶未了、魏帝使人催、又有如用仄韻首句押他仄聲、獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯、深林人不知、明月來相照、又有如用仄韻首句押平聲、妾有羅衣裳、秦王

○七言絕句正格の如き、第三句の第五字、唐詩必平字を用ふ、仄を用ふる者極めて少なし。○上句の末に靜の字を用ひ、下句の末に閑の字を用ふ、或は上句の末に意の字を用ひ、下句の末に心の字を用ふ、或は上句の中に搖の字を用ひ、下句の同位に撼の字を用ふるの類、竝に禁ぜず。

律詩及び絶句、首句の末に仄字を用ふるも亦可なり、倭俗之れを蹈み落しと謂ふ、前對の詩多く之れを用ふ、又前對に非ずして之れを用ふる者も亦甚多し、須らく首句の末字は聲律に拘はらざるを知るべし。

五言絶句、平聲を押が如き、首句他の平韻を押すあり、朝日照紅粧を照す、銅雀臺に上らんと擬す、畫眉猶未了せず、魏帝人をして催さしむと、又仄韻を用ふるが如き首句他の仄聲を押すあり、獨坐す幽篁の裏、琴を弾じて復長嘯す、深林人知らず、明月來りて相照す、又仄韻を用ふる如き首句平聲を押すあり、妾、羅の衣裳、秦王在せし時

在時作爲舞春風多秋來不堪著凡首句末字須知不拘聲律。

律詩用平仄式與絕句無異第一句下押韻或不押亦可也。

側體 五七言律五七言絕竝押仄韻之外總不拘平仄而如律詩第一句第三句五句七句之末字間用平聲如絕句第三句之末必用平字杜子美望嶽作遊龍門奉先寺作僧靈一夜坐詩高適九月九日酬人詩等蓋可見周弼曰其說與拗體相類。

有律詩用重韻陳子昂詩第二句末押生字第八句末亦用生字。

借韻 如押七支韻可借八微或十二齊一韻是也。嚴滄浪

初學詩法

作春風に舞ふこと多きが爲に秋來著くるに堪へずと凡首句の末字須らく聲律に拘はらざることを知るべし。

律詩に平仄を用ふる式絶句と異なるなし第一句の下韻を押し或は押さざるも亦可なり。

側體 五七言律五七言絶竝に仄韻を押しの外總て平仄に拘はらず而して律詩の如き第一句第三句五句七句の末字間平聲を用ふ絶句の如き第三句の末必平字を用ふ杜子美嶽を望む作龍門の奉先寺に遊ふ作僧靈一夜坐の詩高適が九月九日人に酬ふ詩等蓋見る可し周弼が曰其說拗體と相類すと。

律詩に重韻を用ふるあり陳子昂が詩第二句の末に生字を押し第八句の末も亦生字の字を用ふ。

借韻 七支の韻を押しが如き八微を借る可し或十二齊一韻是なり。嚴滄浪

借韻對、同音不同字、曰借韻、自朱耶之狼狽、致赤子之流離、狼狽獸名、流離鳥名也、又捲簾黃葉落、開戶子規啼、以子對黃、子與紫聲相近也。

字有通作、佗聲、押韻者、泛引詩及文選古詩爲證、殊不知蔡寬夫詩話嘗云、秦漢以前、字書未備、既多假借、而音無反切、平側皆通用、自齊梁後、既拘以四聲、又限以音韻、故士率以偶儷聲病爲工、然則字通作他聲、押韻於古詩則可、若於律詩、誠不當如此、余謂裴虔餘之詩落韻、又本此耳。學林新編

沉存中筆談曰、第二字側入、謂之正格、第二字平入、謂之偏格、唐名賢詩多正格、○篤信案、正格者、仄起之謂也、偏格者、平起之謂也、

借韻對、同音にして何字ならざるを借韻と曰ふ、朱耶の狼狽より赤子の流離を致す、狼狽は獸の名、流離は鳥の名なり、又、簾を捲けば黃葉落ち戸を開けば子規啼く、と、子を以て黃に對す、子と紫と聲相近し。

字通じて佗聲と作るあり、韻を押す者、泛く詩及文選古詩を引て證と爲す、殊に知らず、蔡寬夫が詩話に嘗て云ふ、秦漢以前、字書未だ備はらず、既に多く假借して而して音、反切なし、平側皆通し用ゆ、齊梁より後、既に拘はるに四聲を以てし、又限るに音韻を以てす、故に士率ね偶儷聲病を以て工と爲す、然らば則字通じて他聲と作る、韻を押すことは古詩に於ては則可なり、律詩に於けるが若きは、誠に當に此の如くなるべからず、余謂ふに裴虔餘が詩の落韻、又此れに本づくのみ。學林新編

沉存中が筆談に曰、第二字側入、之れを正格と謂ふ、第二字平入、之れを偏格と謂ふ、唐の名賢の詩正格多し、○篤信案、正格とは、仄起の謂なり、偏格とは、平起の謂なり、凡、上去入、通じて之れを仄聲と謂ふ、詩を學ぶには先

凡上去入通謂之仄聲學詩先要知平仄不然句雖工不入規式今爲初學者作連圈子著規式圖以明之圈中有堅畫者不拘于平仄黑者仄空白者平也。

五言絕句正格

起 ①●○○○

承 ①○○●○

轉 ①○○○●

合 ①●○○○

五言絕句偏格

①○○●○

①●○○○

①○○○●

①○○●○

七言絕句正格

起 ①●○○○○○

承 ①○○●○○○

轉 ①○○○○●○

合 ①●○○○○○

七言絕句偏格

①○○○○●○

①○○○○○●

①○○○○○●○

①○○○○○●○

初學詩法

つ平仄を知らんことを要す然らざれば句工みなりと雖規式に入らず今初學者の爲に連圈子を作り規式の圖を著して以て之れを明にす圈中に堅畫する者は平仄に拘はらず黑なる者は仄空白なる者は平なり。

五言律詩正格

五言律詩偏格

發起
句聯
起
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○

智承
句聯
領
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○

腰轉
句聯
頸
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○

結尾
句聯
合
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○

破題
起句單
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○

對
粘二句
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○

對
反三句
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○

對
粘四句
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○

落句
反五句
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○

粘六句
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○

應起句
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○

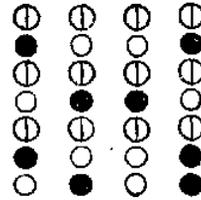
七言律詩正格

七言律詩偏格

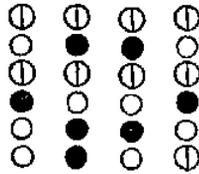
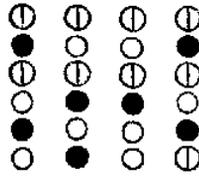
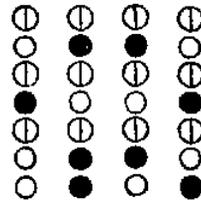
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○

○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○
○●○○○

六言絕句正格



六言絕句偏格



○雜體第六

和韻、宋朝類苑曰、唱和聯句之起、其源遠矣、自舜作歌、阜陶颺言、賡載、○事物紀原曰、顏延年、謝元暉、作詩相倡和、皆不次韻、至唐元稹、作春深二十首、白居易、劉禹錫、和之、亦

○雜體第六

和韻、宋朝類苑に曰、唱和聯句の起、其源遠し、舜歌を作り、皋陶颺言して賡載する自りす、○事物紀原に曰、顏延年、謝元暉、詩を作り相倡和す、皆韻を次せず、唐の元稹に至り、春深二十首を作り、白居易、劉禹錫之れを和す、亦其

用其韻、及令狐楚和詩、多次其韻、次韻始於此也、○文體明辨云、和韻詩有三體、一曰依韻、謂同在一韻中、而不必用其字也、二曰次韻、謂和其原韻、而先後次第皆因之也、三曰用韻、謂用其韻、而先後不必次也、又有因韻而增爲之者、篤信案古人多用次韻、○胡荅溪云、東坡云、古之詩人有擬古之作矣、未有追和古人者也、追和古人詩、則自東坡始、○古人賡和答其來意而已、初不爲韻所縛、中唐以還元稹、白居易、皮日休、陸龜蒙、更相唱和、由是此體始盛、然皆不及他作、嚴羽所謂和韻最害人詩者此也、文體明辨

聯句詩、聯句詩起自柏梁、人各一句、集以成篇、有人各四句者、有人各一聯者、文體明辨○

韻を用ふ、令狐楚詩を和するに及んで、多く其韻を次す、韻を次すると此に始まる、○文體明辨に云、和韻の詩三體あり、一に曰韻に依る、同じく一韻の中に在りて必しも其字を用ひざるを謂ふ、二に曰韻を次す、其原韻を和して、而して先後次第皆之れに因るを謂ふ、三に曰韻を用ふ、其韻を用ひて先後必ずしも次せざるを謂ふ、又韻に因りて増して之れを爲す者あり、篤信案するに、古人の多くは次韻を用ふ、

○胡荅溪か云、東坡が云、古の詩人古に擬するの作あり、未だ古人を追和する者あらず、古人の詩を追和することとは、則東坡より始まる、○古人の賡和は其來意に答ふるのみ、初めより韻に縛せられず、中唐より二のがま以還、元稹、白居易、皮日休、陸龜蒙、更に相唱和す、是れに由りて此體始めて盛なり、然して皆他作に及ばず、嚴羽が謂はゆる和韻最人の詩を害すと云ふ者此れなり、文體明辨

聯句の詩、聯句の詩は柏梁より起る、人各一句、集めて以て篇を成す、人各四句なる者あり、人各一聯なる者あ

篤信曰、有五言聯句、有七言聯句、退之以前
 既有聯句、非昉于退之、爲聯句、昉于退之者
 非也、○聯句、或二人、或三四人、各賦二句、或
 四句、共成長篇、潘確類書○王世貞曰、和韻聯句、
 皆易爲詩、害而無大益、偶一爲之可也、然和
 韻在於押字、渾成聯句在於才力均敵、

首尾吟、第一句與尾句同、邵子擊壤詩中、
 載百三十五首、竝七言律、皆押支韻、

集句詩者、雜集古句以成詩也、自晉以來有
 之、至宋王安石、尤長于此、蓋必博學強識、融
 會貫通、如出一手、然後爲工、若牽合傅會、意
 不相貫、則不足以語此矣、文體明辨○楊升菴曰、
 晉傅咸作七經詩、此乃集句之始、○篤信案
 古人集句詩、多者至百韻、又有文天祥集杜

り、文體明辨○篤信が曰、五言聯句あり、七言聯句有り、退之以
 前既に聯句あり、退之に昉るに非ず、聯句を退之に昉る

とする者は非なり、○聯句或は二人、或は三四人、各
 二句或は四句を賦す、共に長篇と成る、潘確類書○王世貞が

曰、和韻聯句、皆詩の害を爲し易くして、而して大なる益
 なし、偶々一たび之れを爲すは可なり、然して和韻は字を

押すこと渾成なるに在り、聯句は才力均敵なるに在り、

首尾の吟、第一句と尾句と同じ邵子擊壤詩の中、百三
 十五首を載す、竝に七言律皆支の韻を押す、

集句の詩は、古句を雜集して以て詩を成す、晉より以來
 之れあり、宋の王安石に至りて尤も此れに長ず、蓋必博
 學強識、融會貫通、一手に出づるが如くにして、然して後
 工なりと爲す、若し牽合傅會、意相貫かざれば、則以て此
 れを語るに足らず、文體明辨○楊升菴が曰、晉の傅咸七經の
 詩を作る、此れ乃集句の始め、○篤信案するに、古人集句
 の詩多き者は百韻に至る、又文天祥集杜詩あり、最精巧

詩最精巧。

有三言之詩起於晉夏侯湛又押韻冰川詩式曰明蘇祐將進酒詩曰將進酒樂間陳錯華燈襲錦茵觀良時擁光塵獻萬年酬千金嗟何辭不常醴流水逝曜靈枕

四言詩起于漢楚王傳韋孟四言最古在諸詩中獨難以三百篇在前故也。

有五言六句律其詩有對者有不對數有變體有六言絕句有六言八句律有六言排律有七言六句有七言五句有九言詩有一字至七字詩有一字至十字詩有五七言詩有三五七言有四六八言有長短句。

回文詩順讀與倒讀皆成詩句其中有四言回文有五言回文有七言絕句回文七言律

なり。

三言之詩あり、晉の夏侯湛より起る、又韻を押す、冰川詩式に曰明の蘇祐、將進酒の詩に、將に酒を進めんとす、樂間、陳ぬ、華燈を錯へ、錦茵を襲ぬ、良時を觀る、光塵を擁す、萬年を獻す、千金を酬ふ、嗟何ぞ辭せん、常に醴せず、流水逝て、曜靈沈む」と。

四言の詩は漢の楚王の傳韋孟に起る、四言最古し、諸詩の中に在りて獨難し、三百篇前に在るを以ての故なり。

五言六句の律あり、其詩對する者あり、對せざるものあり、數、變體あり、六言絕句あり、六言八句の律あり、六言排律あり、七言六句あり、七言五句あり、九言の詩あり、一字より七字に至る詩あり、一字より十字に至る詩あり、五七言の詩あり、三五七言あり、四六八言あり、長短の句あり。

回文の詩、順讀と倒讀と、皆詩句を成す、其中四言の回文あり、五言の回文あり、七言絶句の回文、七言律の回文あり。

回文。

有反覆體、離合體、借字體。○篤信謂、此體皆戲謔、非風雅之正、今不詳乎此。

口號、或四句、或八句、舛成而速就、建意宣情而已、實在明白條暢。潛確類書

有全篇皆平字格、篤信案、唐陸龜蒙、明丘濬七言律詩、各四十字、無一字仄聲。

有全篇皆仄字格、梅聖俞五言仄體詩、四十字亦無一字平聲。

○句法第七

句眼、冰川子曰、五言詩以第三字爲眼、古人練字只于句眼上練、詩眼用實字、方得句健、星河秋一鴈、砧杵夜千家、又夜潮人到、郭春霧鳥啼山、七言詩以第五字爲句眼、句眼

初學詩法

り。

反覆體、離合體、借字體あり、○篤信謂へらく、此の體皆戲謔にして、風雅の正に非ず、今此に詳にせず。

口號、或は四句、或は八句、舛成して速に就る、意を達し情を宣ぶるのみ、貴きこと明白條暢に在り。潛確類書

全篇皆平字の格あり、篤信案するに、唐の陸龜蒙、明の丘濬七言律の詩、各四十字、一字の仄聲なし。

全篇皆仄字の格あり、梅聖俞五言仄體の詩四十字、一字の平聲なし。

○句法第七

句眼、冰川子が曰、五言の詩は第三字を以て眼と爲す、古人字を練る、只句眼の上にて練る、詩眼實字を用ひて方に句の健なることを得、星河秋一鴈、砧杵夜千家、又夜潮人郭に到り、春霧鳥山に啼く、七言の詩は第五字を以て句眼と爲す、句眼の字練るときは、則句自ら精

四九

字練則句自精神詩眼用實字方得句健朝
登劔閣雲隨馬夜度巴江雨洗兵。

潘邠老云、七言詩第五字要響如返照入江
翻石壁歸雲擁樹失山村翻字失字是響字
也、五言詩第三字要響如圓荷浮小葉細麥
落輕花浮字落字是響字也、所謂響者致力
處也、予竊以爲字字當活活則字字自響、呂
氏童蒙訓

交股法、王介甫詩春殘葉密花枝少睡起
茶多酒盞疎此一聯以密對疎以多對少正
交股用之所謂蹉對也。

句中對、四年三月半新笋晚花時元稹遠山
芳艸外流水落花中司空圖孤雲獨鳥川光暮
萬井千山海氣深李嘉祐

神あり、詩眼實字を用ひ、方に句の健なることを得、朝に
劔閣に登れば雲馬に隨ひ、夜巴江を渡れば雨兵を洗ふ、

潘邠老が云、七言の詩は、第五字響を要す、「返照江に入り
て石壁を翻へし、歸雲樹を擁して山村を失す」といふが
如き翻の字失の字是響の字なり、五言の詩第三字響を
要す、「圓荷小葉浮び、細麥輕花落つ」といふが如き浮の字
落の字是響の字なり、謂はゆる響は、力を致す處なり、予
竊に以爲字々當さに活すべし、活すれば則字々自ら響
く。呂氏童蒙訓

交股法、王介甫が詩に「春殘し葉密にして花枝少く睡
起茶多くして酒盞疎なり」此の一聯密を以て疎に對し、
多を以て少に對す、正に股を交へ之れを用ふ、謂はゆる
蹉對なり。

句中の對、四年三月半新笋晚花の時元稹遠山芳草の
外流水落花の中司空圖孤雲獨鳥川光暮、萬井千山海氣
深李嘉祐

三截體、李白詩曰、日落沙明天倒開、波搖石動水縈廻。

句作「兩節」、老杜詩云、不知西閣意、肯別定留人、肯別耶、定留人耶、山谷猶愛其深遠、閑雅也。

折句格、玉屑曰、六一居士詩云、靜愛竹時來、野寺、獨尋春、偶過溪橋。

折腰句法、七言上三字下四字、鳳皇樂奏鈞天曲、烏鵲橋過織女河、或上五字下二字、杖藜嘆世者誰子、中天月色好誰看、上二下五、杜詩不貪夜識金銀氣、遠書朝看麋鹿遊、錯綜句法即倒句、野禽啼杜宇、山蝶夢莊周、又香稻啄餘鸚鵡粒、碧梧棲老鳳皇枝、翻案句法、是依古人句而翻案之也、不用茶

三截體、李白が詩に曰、「日落ち沙明かにして天倒に開く、波搖き石動きて水縈廻」。

句、兩節と作る、老杜が詩に云ふ、「知らず西閣の意、肯て別んや、定て人を留めんや」と、肯て別れんや、定て人を留めんやなり、山谷は猶其の深遠閑雅を愛す。

折句の格、玉屑に曰、「六一居士が詩に云ふ、「靜に竹を愛して時に野寺に來り、獨春を尋ねて偶々溪橋を過ぐ」。

折腰の句法、七言は上三字下四字、鳳皇の樂は鈞天の曲を奏し、烏鵲の橋は織女の河を過ぐ、或は上五字下二字「藜を杖て世を嘆ずる者は誰子ぞ、中天月色好し誰か看る」、上二下五、杜が詩に貪らずして夜金銀の氣を識り、害に遠りて朝に麋鹿の遊ぶを看る」。

錯綜の句法、即ち倒句、「野禽杜宇啼き、山蝶莊周夢む」、又「香稻啄み餘す鸚鵡粒、碧梧棲み老ふ鳳皇の枝」。

翻案の句法、是れ古人の句に依りて、而して之れを翻案

莢子細看、管取明年各強健、丘瓊山詩、白髮年來也不公、春風亦與世情同。

連珠句、穿花蛺蝶深深見、點水蜻蜓款款飛、又疊嶂掛流平地起、危樓曲閣半天開、又積水長天迷遠客、荒城極浦足寒雲。

疊三實字句、野艸花葉細、不辨蒼葦蕪。

疊五實字法、風雨晦明淫、跋蹙瘖聾盲、又有疊七字法。

用子母字粧句、竹疎烟補密、梅瘦雪添

肥、社日雨多晴較少、出子詩法指南

○總論詩法第八

夫學詩者以識爲主、入門須正、立志須高、以淡魏盛唐爲師、不作開元天寶以下人物、若自生退屈、卽有下劣詩魔入其肺腑之間、由

するなり、用ひず葉莢子細に看ることを、管取す明年各強健と、丘瓊山が詩に「白髮年來也公ならず、春風も亦世情と同じ」。

連珠句、「花を穿つ蛺蝶深々として見へ、水に點する蜻蜓款々として飛ぶ」又「疊嶂掛流平地に起り、危樓曲閣半天に開く」又「積水長天遠客迷ひ、荒城極浦寒雲足る」。

三實字を疊む句、「野艸花葉細く、蒼葦蕪を辨へず」。

五實字を疊む法、「風雨晦明淫、跋蹙瘖聾盲」又七字を疊む法あり。

子母字を用ひて粧ふ句、「竹〔疎〕にして烟補ふて〔密〕に、梅〔瘦〕せて雪添へて〔肥〕の」社日雨〔多〕くして晴較〔少〕し、詩法指南に出づ

○詩法を總論す第八

夫れ詩を學ぶ者は識を以て主と爲す、門に入ること須らく正かるべく、志を立ること須く高かるべく、淡魏盛唐を以て師と爲し、開元天寶以下の人物と作らざれ、若自ら退屈を生せば、卽下劣の詩魔、其肺腑の間に入ること

立志之不高也、行有未至、可加工力、路頭一差、愈驚愈遠、由入門之不正也、故曰學其上、僅得其中、學其中斯爲下矣、又曰、見過於師、僅堪傳授、見與師齊、減師半德也、工夫須從上做下、不可從下做上、先須熟讀楚詞朝夕、諷詠以爲之本、及讀古詩十九首、樂府四篇、李陵、蘇武、漢魏五言、皆須熟讀、卽以李杜二集枕藉觀之、如今人之治經、然後博取盛唐諸名家詩、醞釀胸中、久之自然悟入、雖學之不至、不失正路、澹浪

東坡教人作詩曰、熟讀毛詩、國風、離騷、曲折盡在是矣、僕嘗以此語太高、後年齒益長、乃知東坡之善誘人也、許彥周詩話

晦菴曰、作詩須從陶柳門庭中來、乃佳、不如

あらん、志を立ることの高からざるに由りてなり、行未だ至らざることあらば、工力を加ふ可し、路頭一たび差へば、愈驚せて愈遠し、門に入ることの正しからざるに由る、故に曰、其上を學んで僅に其中を得、其中を學べば、斯に下と爲ると、又曰、見師に過ぎて、僅に傳授するに堪へたり、見師と齊ければ師の半德を減す、工夫須らく上より下を做すべく、下より上を做す可からず、先づ楚詞を熟讀し、朝夕諷詠して以て之が本と爲すべし、及び古詩十九首、樂府四篇、李陵、蘇武、漢魏の五言を讀みて、皆須らく熟讀すべし、卽李杜二集を以て枕藉して之れを觀る、今人の經を治むるが如くに、然して後博く盛唐諸名家の詩を取り、胸中に醞釀せば、久しふして自然に悟入せん、之れを學んで至らずと雖、亦正路を失はず、澹浪

東坡人に詩を作ることを教えて曰、毛詩國風離騷を熟讀せよ、曲折盡く是れに在りと、僕嘗て此の語を以て太だ高しとす、後年齒ひ益長じて、乃東坡が善く人を誘くことを知る、許彥周詩話

晦菴の曰、詩を作るに須らく陶柳が門庭の中より來りて

是無以發蕭散沖澹之趣、不免於局促塵埃、無由到古人佳處也。如選詩及韋蘇州詩亦不可不熟讀。

又曰、作詩先用看李杜、如士人治本經、然本既立、次第方可看蘇黃、以次諸家詩。

大率作文須學古人、學古人尙恐不至、古人

況學今人哉、其不至古人必矣。室中語

大凡作詩、須用三百篇與離騷、言不關於世

教、義不存於比興、亦徒勞耳。堯龜章

梁橋曰、學詩須取材于選、效法于唐、又曰、學

詩須枕藉騷選、死生李杜。

徐禎卿曰、古詩三百可以博其源、遺範十九

可以約其趣、樂府雄高可以厲其氣、離騷深

永可以裨其思。

乃佳なるべし、是の如くならざれば、以て蕭散沖澹の趣を發することなくして、局促塵埃を免れず、由りて古人の佳處に到ることなきなり、選詩及び韋蘇州が詩の如き、亦熟讀せざる可からず。

又曰、詩を作るには先づ李杜を看ることを用ふ、士人の本經を治むるが如くす、然して本既に立ちて、次第して方に蘇黃を看る可し、以て諸家の詩を次にす。

大率^{大率}文を作る、須らく古人を學ぶべし、古人を學ぶも尙古人に至らざることを恐る、況んや今人を學ぶをや、其古人に至らざること必せり。室中語

大凡詩を作る、須らく三百篇と離騷とを用ふべし、言世教に關らず、義比興を存せざるは、亦徒に勞するのみ。堯龜章

梁橋が曰、詩を學ぶには須らく材を選に取、法を唐に效ふべし、又曰、詩を學ぶには須らく、騷選に枕藉し李杜に死生すべし。

徐禎卿が曰、古詩三百、以て其源を博す可し、遺範十九以て其趣を約すべし、樂府は雄高、以て其氣を厲す可し、離騷は深永、以て其思を裨く可し。

魏莊渠曰、日諷詠三百篇、旁採漢魏以及盛唐、其調每下、漢初語意尙渾涵、魏晉漸覺發露、其後費雕琢矣、冲澹閒遠之趣爲之頓衰。

學老杜詩、所謂刻鵠不成、尙類鶩也、學晚唐諸人詩、所謂作法於涼、其弊猶貪作法於貪、弊將若何、黃魯直與趙伯充書

學詩當以子美爲師、有規矩故可學、退之於詩、本無解處、以才高而好耳、淵明不爲詩、寫其胸中之妙耳、學杜無成、不失爲功、無韓之才與陶之妙、而學其詩、終樂天耳。陳后山

有問荆公、老杜詩何故妙絕古今、公曰、老杜固嘗言之、讀書破萬卷、下筆如有神、東坡雜錄夫詩有別才、非關書也、詩有別趣、非關理也、然非多讀書、多窮理、則不能極其至、宋嚴羽

初學詩法

魏莊渠が曰、日に三百篇を諷詠して、旁く漢魏より以て盛唐に及ぶまでを採る、其調毎に下る、漢の初め、語意尙渾涵、魏晉漸く發露を覺ふ、其後は彫琢を費す、冲澹閒遠の趣之れが爲めに頓に衰ふ。

老杜か詩を學ぶ、謂はゆる鵠を刻んで成らざれば尙鶩に類するなり、晚唐諸人の詩を學ぶ、謂はゆる法を涼に作す、其弊猶貪る、法を貪に作す、弊將に若何せんとするものなり、黃魯直、趙伯充に與ふる書

詩を學ぶに、當さに子美を以て師と爲すべし、規矩ある故に學ぶ可し、退之が詩に於ける本と解處なし、才高を以て好きのみ、淵明は詩を爲らず、其胸中の妙を寫すのみ、杜を學んで成ることなくとも、功を爲すことを失せず、韓が才と陶の妙となくして、而して其詩を學べば、終に樂天ならんのみ、陳后山

荆公に問ふものあり、老杜が詩何か故に古今に妙絶なる、公の曰、老杜固に嘗て之れを言ふ、一書を讀んで萬卷を破る、筆を下せば神あるが如しと、東坡雜錄

夫れ詩に別才あり、書に關るに非ず、詩に別趣あり、理に關るに非ず、然して多く書を讀み多く理を窮むるに非ざれば、則其の至を極むること能はず、宋嚴羽

宋唐庚曰、凡作詩平居須收拾詩材以備用
又曰、詩在與人商論、深求其疵而去之、等閑
一字放過、則不可、殆近法家、故謂之詩律。

初學作詩、寧失之野、不可失之靡麗、失之野

不害氣質、失之靡麗、不可復整頓、呂氏童蒙訓

寧拙無巧、寧朴無華、寧粗無弱、寧僻無俗、詩

文皆然、后山詩話

詩之不工、只是不精思耳、不思而作、雖多亦

奚以爲、白石詩話

語貴含蓄、東坡云、言有盡、而意無窮者、天下

之至言也、玉屑

魏文帝曰、文以意爲主、以氣爲輔、以詞爲衛、

詩不可鑿空強作、待境而生、便自工耳、黃山

谷

宋の唐庚が曰、凡そ詩を作る、平居須らく詩材を收拾して以て用に備ふべし。

又曰、詩は人と商論し、深く其疵を求めて而して之れを去るに在り、等閑に一字も放過すれば則不可なり、殆んど法家に近し、故に之れを詩律と謂ふ。

初學詩を作る、寧ろ之れを野に失するも、之れを靡麗に失す可からず、之れを野に失するは氣質を害せず、之れを靡麗に失すれば、復整頓す可からず、呂氏童蒙訓

寧ろ拙くとも巧なること無かれ、寧ろ朴なるとも華なること無かれ、寧ろ粗くとも弱きこと無かれ、寧ろ僻なるとも俗なること無かれ、詩文皆然り、后山詩話

詩の工ならざる、只是れ精く思はざるのみ、思はずして作る、多しと雖、亦奚を以て爲ん、白石詩話

語は含蓄を貴ぶ、東坡が云、言は盡ることありて、而して意は窮まりなしと云ふ者は、天下の至言なり、玉屑

魏の文帝の曰、文は意を以て主と爲し、氣を以て輔と爲し、詞を以て衛と爲す。

詩は鑿空し強いて作る可からず、境を待ちて生ずれば、便ち自ら工なるのみ、黃山谷

詩有三儉、一曰儉語、二曰儉意、三曰儉勢、儉語最拙。

詩有三儉、儉語最是鈍、賊、如傅長、日、月光、大清、陳後主、日、月光、天德、是也、儉意事雖可、罔情不可、原、如柳渾、大液、微波、起、長楊、高樹、秋、沉、佺、期、小池、殘、著、暹、高樹、晚、涼、歸、是也、儉勢才巧、意精、無、痕迹、蓋、詩、儉、狐、白、手、也、如、嵇、康、目、送、歸、鴻、手、揮、五、絃、王、昌、齡、手、攜、雙、鯉、魚、目、送、千、里、鴈、是也、李、淑、詩、苑

作詩不可直說破、須如詩人婉而成章、楚辭最得詩人之意、如「沅有芷兮、澧有蘭、思公子兮、未敢言、則思之之意深、而不可以言語形容也、若說破如何思、則意味淺矣、張南軒

詩爲韻所縛、作者須以題意爲主、韻爲客、使

詩に三儉あり、一に曰語を儉む、二に曰意を儉む、三に曰勢を儉む、語を儉むは最拙し。

詩に三儉あり、語を儉む、最是れ鈍賊、傅長が「日月光清を光らす」陳の後主の「日月光天徳を光らす」か如きはなり、意を儉むは、事罔ふ可しと雖、情原す可からず、柳渾が「大液微波起る、長楊高樹の秋、沉佺期が「小池殘著暹き、高樹晚涼歸る」と云ふが如きはなり、勢を儉むは才巧に意精く痕迹なし、蓋詩に狐白を儉むの手なり、嵇康が「目に歸鴻を送り、手に五絃を揮ふ」、王昌齡が「手に雙鯉魚を携へ、目に千里の鴈を送る」と云ふが如きはなり、李淑、詩苑

詩を作るに直に說破す可からず、須らく詩人の婉にして章を成すが如くなるべし、楚辭最詩人の意を得たり、「沅に芷あり、澧に蘭あり、公子を思ふて、未だ敢て言はず」の如し、則之れを思ふの意深くして、而して言語を以て形容す可からず、若し如何に思ふと說破せば、則意味淺し。

張南軒

詩は韻に縛せらる、作者須らく題意を以て主と爲し、韻

題意與韻若出天成不作牽合補塞態方是
作手若爲韻扞格反致意義與矛盾則舛錯
鄙俚之弊不終無矣宋景濂

詩之氣勢最忌斷續如領聯與起句不接腹
聯與頷聯不接結句又與前聯不相管攝非
詩也作者須一氣呵成貫珠而下不露痕迹
方妙楊士奇

詩貴乎實實則隨事命意遇景得情如傳神
寫真各盡其態自不至有重複蹈襲之患范德機

詩要鋪敘正波瀾濶用意深琢句雅使字當
下字響楊弘下同

人所多言我寡言之人所難言我易言之則
自不俗

を客と爲し題意と韻とをして天成に出るが若くなら
しむべし牽合補塞の態を作さざるは方に是れ作手若
し韻の爲に扞格せられ反りて意義與に矛盾すること
を致さば則舛錯鄙俚の弊終に無くんばあらじ宋景濂
詩の氣勢最斷續を忌む領聯起句と接せず腹聯頷聯と
接せず結句又前聯と相管攝せざるが如きは詩に非ざ
るなり作者須らく一氣に成し珠を貫いて下り痕迹を
露さざるべくして方に妙なり楊士奇

詩は實を貴ぶ實なれば則事に随つて意を命し景に遇
ふて情を得神を傳へ眞を寫して各其態を盡くすが如
し自ら重複蹈襲の患あるに至らず范德機

詩鋪敘正しく波瀾濶く意を用ふること深く句を琢く
こと雅に字を使ふこと當り字を下すこと響かんこと
を要す楊弘下同

人多く言ふ所寡く之れを言ひ人言ひ難き所我易く之
れを言へば則自ら俗ならず

作詩須先得意、意得則詞自達、韻自協、篇自易成、若漫不立意、而徒致飾于字句之間、則不入於割裂、卽入於補綴、未善也。丘濬下同、詩中用字一毫不苟、倘一字不雅、則一句不工、一句不工、則全篇皆廢矣。

作詩有起承轉合四字、以絕句言之、第一句是起、第二句是承、第三句是轉、第四句是合、律詩第一聯是起、第二聯是承、第三聯是轉、第四聯是合、古詩長律亦以此法求之。詩法源流、下同

大抵起處要平直、承處要從容、轉處要變化、結處要淵永。

絕句則當先得後二句、律詩則當先得中四句、律詩固以對偶爲工、然得意處則意對、語

詩を作るには、須らく先づ意を得べし、意得れば則詞自ら達し、韻自ら協ひ、篇自ら成り易し、若し漫にして意を立てずして、而して徒に飾を字句の間に致さば、則割裂に入らずんば、卽補綴に入らん、未だ善ならざるなり。丘濬、下同

詩中に字を用ふる、一毫も苟もす可からず、倘一字も雅ならざれば、則一句工ならず、一句工ならざれば、則全篇廢る。

詩を作る、起承轉合の四字あり、絶句を以て之れを言へば、第一句是れ起、第二句是れ承、第三句是れ轉、第四句是れ合、律詩は第一聯是れ起、第二聯是れ承、第三聯是れ轉、第四聯是れ合、古詩長律も亦此の法を以て之れを求めよ。詩法源流、下同

大抵起處は平直を要す、承處は從容を要す、轉處は變化を要す、結處は淵永を要す。

絶句は則當さに先づ後の二句を得べし、律詩は則當さに先づ中の四句を得べし、律詩は固に對偶を以て工と爲

不對品可。

凡用通用字、無法、卽軟弱、軟弱猶易瘵、鄙俗最難醫。

御掃篇曰、凡作詩工拙所未論、大要忌俗而已。

明暗二例者、作詩之法無出于此、蓋凡作字非明則暗、冰川詩式○篤信案詩中明言所題之物、是明也、詩中不顯言所題、只說其事、而其題自見、如詠雨詩中不言雨字、又如寶常聞子規作詩中不言子規字、是暗也、又有無題格、隱諱其意、不欲明言、或隱意、隱字、使人自得。

藝苑雌黃云、古人詩押字、或有語顛倒而無害於理者、如韓退之以參差爲差參、以玲瓏

す、然して意を得る處は則意對し、語對せざるも亦可なり。凡通用の字を用ふる、法なければ卽軟弱なり、軟弱猶瘵し易し、鄙俗最難し難し。

御掃篇に曰、凡詩を作る工拙は未だ論せざる所、大要俗を忌むのみ。

明暗の二例は、詩を作るの法、此れに出づること無し、蓋凡字を作る、明に非ずんば則暗、冰川詩式○篤信案するに、詩中明に題する所の物を言ふ、是れ明なり、詩中顯に題する所を言はず、只其事を説く、而して其題する所自ら見はる、雨を詠する詩中に雨の字を言はざるが如し、又寶常が子規を聞く作の如き詩中子規の字を言はず、是れ暗なり、又無題の格あり、其意を隱し諱んで、明言するを欲せず、或は意を隱し字を隱し、人をして自得せしむ。

藝苑雌黃に云ふ、古人の詩、字を押す、或は語顛倒して而して理に害なき者あり、韓退之、參差を以て差參と爲し、

爲瓏玲是、○篤信案、古人詩曰、俯仰迷下上、又詩書置後先、又後日懸知漸葬幽之類是也、或以慷慨爲慨慷、以新鮮爲鮮新、圭經緯爲緯經、以稊稗爲稊稗、以圭角爲角圭、以參差爲差參、以唐虞爲虞唐、以紅白爲白紅、以俯仰爲仰俯、以瓏玲爲瓏玲、又漢溪詩話曰、字有顛倒可用者、如羅綺綺羅、圖畫畫圖、毛羽羽毛、白黑黑白之類。

見有理如晦翁之作者、則指之曰、此儒者詩也、見有淺如誠齋之作者、則指之曰、此俗學者詩也、嗟是豈徒足知詩哉、尤不足以知誠齋翁矣、蓋晦翁之詩、如烝民懿戒諸作、不害其爲二雅之正、誠齋之詩、如竹枝欵乃之作、不害其爲國風之餘也、詩法源流

瓏玲を以て瓏玲と爲すが如きは是れなり、○篤信案するに、古人の詩に曰「俯仰下上に迷ふ」又「詩書後先に置く」又「後日懸かに知る漸く葬幽」の類は是れなり、或は慷慨を以て慨慷と爲し、新鮮を以て鮮新と爲し、經緯を以て緯經と爲し、稊稗を以て稊稗と爲し、圭角を以て角圭と爲し、參差を以て差參と爲し、唐虞を以て虞唐と爲し、紅白を以て白紅と爲し、俯仰を以て仰俯と爲し、瓏玲を以て瓏玲と爲す、又漢溪詩話に曰「字顛倒して用ふ可き者あり、羅綺綺羅、圖畫畫圖、毛羽羽毛、白黑黑白の類の如しと、

理あること晦翁の作の如き者を見ては、則之れを指して曰、此れ儒者の詩なり、淺きこと誠齋が作の如き者あるを見ては、則之れを指して曰、此れ俗學者の詩なりと、嗟是豈徒に詩を知るに足らんや、尤以て誠齋翁を知るに足らず、蓋晦翁の詩は、烝民懿戒の諸作の如し、其二雅の正と爲るに害あらず、誠齋が詩は、竹枝、欵乃の作の如し、其の國風の餘と爲るに害あらずなり、詩法源流

詩家借用古人語、而不用其意爲最妙法、楊誠齋

詩家病使事太多、天下事雖不可不讀、然謹不可有意於用事、梁橋、下同

對句好可得、結句好難得、發句好尤難得。詩者用意貴精深、下語貴平易。

譏人不可露、使人不覺。

詩不要有閑字、七言若減兩字、成五言而意思足、便是閑字。滄浪詩話

作詩對偶不切則失之粗、太切則失之俗、梁橋 ○白石詩說曰、花必用柳對、是兒曹語、其不切亦病也。

杜少陵好用經中全句爲詩、如病橋云、雖多亦奚爲、又渣闕云、致遠思恐泥、又如丹青不

詩家古人の語を借り用ひて、而して其意を用ひざる最妙法と爲す。楊誠齋

詩家事を使ふこと太多きを病む、天下の事讀ますんばある可からずと雖然も謹んで事を用ふるに意あるべからず。梁橋、下同

對句の好きは得可し、結句の好きは得難し、發句の好きは尤得難し。詩は意を用ふることに精深を貴ぶ、語を下すことに平易を貴人を譏るに露す可からず、人をして覺えざらしめよ。

詩閑字あることを要せず、七言兩字を減じ五言と成して而して意思足るが若き、便ち是れ閑字。滄浪詩話

詩を作るに對偶切ならずんば則之を粗に失す、ただ切ならば則之れを俗に失す、梁橋 ○白石詩說に曰、花は必柳を用て對す、是れ兒曹の語なり、其切ならざるも亦病なり。

杜少陵好んで經中の全句を用ひて詩を爲る、病橋の如き云ふ、多しと雖亦奚か爲ん、又、闕を遣るに云、遠を致さば恐くは泥まんことを思ふ、又、丹青知らず老の將さ

知老將至、富貴於我、如浮雲之類、冰川詩式
古人分題、或各賦一物、如云送某人分題得
某物也、亦曰探題、滄浪詩話

昔梅聖俞日課一詩、余爲方學若作行狀、其
家以陸放翁手錄詩藁一卷爲潤筆、題其前
云、七月十一日至九月二十九日計七十八
日、得詩一百首、陸之日課尤勤於梅、二公豈
貪多哉、藝之熟者必精、理勢然也。劉後持文

凡作詩、須命終篇之意、切勿以先得一句一
聯、因而成章、如此則意多不屬、然古人亦不
免如此、如述懷卽事之類、皆先成詩、而後命
題者也。室中語

詠物詩、不待分明說盡、只髣髴形容、便見妙

處。呂氏童
蒙訓

初學詩法

に至らんとすることを、富貴我に於て浮雲の如しといふの類の如し。冰川詩式
古人題を分つ、或は各一物を賦す、某人を送りて題を分ちて某物を得ると云ふが如きなり、亦題を探ぐると曰ふ。冰川詩式

昔梅聖俞、日に一詩を課す、余方學若が爲めに、行狀を作る、其家、陸放翁が手録の詩藁一卷を以て潤筆と爲す、其前に題して云ふ、七月十一日より九月二十九日に至りて、計るに七十八日、詩一百首を得たり、陸が日課尤も梅より勤む、二公豈多きを食らんや、藝の熟する者は必精し、理勢然り。劉後持文

凡詩を作る、須らく終篇の意を命ずべし、切に先づ得る一句一聯を以て因て章を成すこと勿れ、此の如くなれば、則意多くは屬せず、然して古人も亦此の如くなることを免れず、述懷卽事の類の如き、皆先づ詩を成して而して後題を命ずる者なり。室中語

物を詠する時、分明に説き盡すことを待たず、只形容を髣髴して、便ら妙處を見る。呂氏童蒙訓

作詩不可使一字無用、須是字字少不得、又不可使一字不佳、須是字字穩當、又不可使一字無來歷、字字要有出處、要無鄙俚、唐詩調解

白樂天與元九書曰、凡人爲文私於自是不忍於割截、或失於繁多、其間研蚩益又自感、必待交友有公鑒無姑息者、討論而削奪之、然後繁簡當得其中矣。

詩之用事不可牽強、必至於不得不用而後用之、則事辭爲一、莫見其安排醜湊之迹、石林詩話

林詩話

荆公云、凡人作詩不可泥於對屬、如歐陽公作泥滑滑、云、畫簾陰陰隔宮燭、禁漏杳杳深千門、千字不可以對宮字、若當時作朱門、雖

詩を作る一字も用無らしむ可からず、須らく是れ字々少き得ざるべし、又一字も佳ならざらしむ可からず、須らく是れ字々穩當なるべし、又一字も來歴なからしむ可からず、字々出處あるを要す、鄙俚なきを要す、唐詩調解

白樂天元九に與ふる書に曰、凡人、文を爲る、自ら是とするに私して、割截に忍びず、或は繁多に失し、其間研蚩益、又自ら感ず、必交友の公鑒ありて姑息なき者を待ちて、討論して而して之れを削奪し、然して後當さに繁簡其中を得べし。

詩の事を用ふる牽強す可からず、必用ひざることを得ずして、而して後之れを用ふるに至るときは、則事辭一と爲る、其安排醜湊の迹を見ること莫れ、石林詩話

荆公が云ふ、凡人、詩を作る、對屬に泥む可からず、歐陽公泥滑々を作るが如し、云ふ、畫簾陰々として宮燭を隔つ、禁漏杳々として千門深しと、千の字以て宮の字に對す可からず、若し當時朱門と作すときは、以て對す可しと

可以對、而句力便弱耳。王直方

老杜云、新詩改罷自長吟、文字頻改工夫自出、近世歐公作文先貼於壁、時加竄定、有終篇不留一字者、魯直長年多改、定前作、玉屑東坡送人守嘉州古詩、其中云、峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流、謫仙此語誰解、道請君見、月時登樓、上兩句全是李謫仙詩、故繼之以謫仙此語、誰解、道請君見、月時登樓之句、此格本出於李謫仙、其詩云、解道澄江淨如練、令人還憶謝元暉、蓋澄江淨如練、卽元暉全句也、後人襲用此格、愈變愈工。漁隱解縉曰、詩在相題、不可一律而論、有宜含蓄者、則意當厚、有宜豪放者、則意當發露、有宜莊重者、則語當痛快、有宜輕逸者、則語當流

雖、而して句法便ち弱きのみ。王直方

老杜が云ふ「新詩改め罷んで自ら長吟す」と、文字頻に改むれば工夫自ら出づ、近世歐公文を作る、先づ壁に貼し、時に竄定を加へ、終篇一字をも留めざる者あり、魯直長年多く前作を改め定む。玉屑

東坡人の嘉州に守たるを送る古詩其中に云ふ「峨眉山月半輪の秋影は平羌江水に入りて流る、謫仙が此語誰か道ふことを解する、請ふ君月を見て時に樓に登れ」と、上の兩句全く是れ李謫仙が詩、故に之れに繼ぐに「謫仙が此語誰か道ふことを解する、請ふ君月を見て時に樓に登れ」の句を以てす、此格本と李謫仙に出づ、其詩に云ふ「道ふことを解す澄江淨ふして練の如しと、人をして還て謝元暉を憶はしむ」と、蓋澄江淨ふして練の如しとは、卽元暉が全句なり、後人此格を襲用して、愈々工なり。漁隱

解縉が曰、詩は題を相るに在り、一律にして論ず可からず、含蓄に宜き者あれば、則意當に厚くすべし、豪放到宜しき者あれば、則意當に發露すべし、莊重に宜き者あれ

麗。

欲造平淡、當自組麗中來、落其粉華、然後可造平淡之境、如此陶謝不足進矣、今之人多作拙易詩、而自以爲平淡者、未嘗不絕倒也。

韻語陽秋

張仲達詠鷺、詩云、滄海最深處、鱸魚銜得歸、張文寶曰、佳則佳矣、爭奈鷺鷥脚太長、

荆湖近事

池塘生春艸、園林變夏禽、世多不解此語爲工、蓋欲以奇求之爾、此詩之工正在無所意、猝然與景相遇、備以成章、不假繩削、故非常情之所能到、詩家妙處、當須以此爲根本、而思苦言艱者、往往不悟、石林詩話

明皇甫汈曰、作詩須量力度才、就其近似者、

は、則語當に痛快なるべし、輕逸に宜き者あれば、則語當に流麗なるべし。

平淡に造らんと欲せば、當に組麗の中より來りて其粉華を落すべし、然して後平淡の境に造る可し、此の如くなれば陶謝進むに足らず、今の人多く拙易の詩を作りて、而して自ら以て平淡と爲す者は、未だ嘗て絶倒せずんばあらず。韻語陽秋

張仲達、鷺鷥を詠する詩に云ふ、「滄海最深き處、鱸魚銜み得て歸る」、張文寶が曰、佳なることは則佳なり、鷺鷥の背脚太だ長きを爭あやなせん。荆湖近事

「池塘春艸を生じ、園林夏禽に變ず」と、世多く此語の工たることを解せず、蓋、奇を以て之れを求めんと欲するのみ、此詩の工、正に意とする所なきに在り、猝然として景と相遇ふ、備さに以て章を成して、繩削を假らず、故に常情の能く到る所に非ず、詩家の妙處、當さに須く此れを以て根本と爲すべし、而して思苦言艱なる者、往々悟らず。石林詩話

明の皇甫汈が曰、詩を作る、須く力を量り才を度りて其

而摸倣之、久則成家矣、若性質恬曠而務求華豔、才情綺麗而強擬沉鬱、始雖效顰、終失故步、所謂行岐路者不至、懷二心者無成也。萬立方韻語陽秋云、選詩駢句甚多、如宣尼悲獲麟、西狩泣孔丘、千憂集日夜、萬感盈朝昏、萬古陳往還、百代勞起伏、多士成大業、羣賢濟洪績之類、恐不爲後人之法。

陸士衡文賦云、立片言以居要、乃一篇之警策、此要論也、杜詩云、語不驚人死不休、所謂驚人語、即警策也。蓋察

山谷曰、詩意無窮而人才有限、以有限之才、追無窮之意、雖淵明少陵不得工也、不易其意而造其語、謂之換骨法、規模其意而形容之、謂之奪胎法。

近く似たる者に就て而して之れを摸倣すべし、久しきときは則家を成す、若し性質恬曠にして而して務めて華豔を求め、才情綺麗にして、而して強て沉鬱に擬せば、始めは顰に效ふと雖、終に故歩を失せん、謂はゆる岐路を行く者は至らず、二心を懷く者は成ることなきなり。

萬立方韻語陽秋に云ふ選詩駢句甚多し、宣尼獲麟を悲み、西狩孔丘を泣かしむ、千憂日夜に集まり、萬感朝昏に盈つ、萬古往還を陳べ、百代起伏を勞す、多士、大業を成し、羣賢、洪績を齊ふの類の如き、恐くは後人の法と爲らじ。

陸士衡が文の賦に云、片言を立て、以て要に居る、乃一篇の警策、此れ要論なりと、杜詩に云ふ語、人を驚かさずんば死すとも休せずと、謂はゆる人を驚かさず語は、即警策なり。蓋察

山谷が曰、詩意窮り無くして人才限りあり、限りあるの才を以て、窮まりなきの意を追ふ、淵明少陵と雖、工なることを得ず、其意を易へずして、而して其語を造る、之れを換骨の法と謂ふ、其意を規模し、而して之れを形容する、之れを奪胎の法と謂ふ。

陳永康曰、高不可言、高、閑不可言、閑、靜不可言、靜、苦不可言、苦、樂不可言、樂、漫叟詩話曰、陳本明論詩云、當言用勿言體、則意深矣、若言冷則云、可嚙、不可漱、言靜則言、不聞、人靜、聞履靜之類。

王世貞曰、詩有起有結、有喚有應、有過有接、有虛實、有輕重、偶對欲稱、壓韻欲穩、使事欲切、使字欲當、此數端者、一之未至、末以言詩也。

李夢陽曰、古人之作、其法雖多端、大抵前疎者後必密、半瀾者半必細、一實者一必虛、疊景者意必二。

何景明曰、詩雖盛稱於唐、其好古者、自陳子昂後、莫若李杜二家、然二家歌行近體、識有

陳永康が曰、高きを高しと言ふ可からず、閑を閑と言ふ可からず、靜を靜と言ふ可からず、苦を苦と言ふ可からず、樂を樂と言ふ可からず、漫叟詩話に曰、陳本明詩を論じて云、用を言ふに當りて體を言ふこと勿れは、則意深し、冷を言へば則嚙む可し、漱く可からずと云ひ、靜を言へば則人の靜なるを聞かず、履の靜かなるを聞くと言ふの類の若し。

王世貞が曰、詩に起あり結あり、喚あり應あり、過あり接あり、虛實あり、輕重あり、偶對は稱はんことを欲し、韻を壓すことは穩ならんことを欲し、事を使ふことは切ならんことを欲し、字を使ふことは當らんことを欲す、此の數端の者、一の未だ至らざるも、以て詩を言ふこと未^なし。

李夢陽が曰、古人の作、其法多端なりと雖、大抵前疎なる者は後必密に、半瀾き者は半必細なり、一實なる者は一必虛なり、景を疊ぬる者は意必二なり。

何景明が曰、詩は盛に唐を稱すと雖、其古を好む者は、陳子昂より後、李杜の二家に若くは莫し、然ども二家歌行近體法る可き有ることを識る、而して古作尙離れ去る

可法、而古作尙有離去者、猶未盡可法之也。故景明學歌行近體、有取於二家、旁及唐初盛詩人、而古作必從漢魏求之。

王世貞曰、賈島三月正當三十日、與顧況野人自愛山中宿、同一法、以抽起、喚出巧意、結語、俱堪諷詠。

陸放翁集句杜詩序曰、要在得古作者之意、意既深遠、非用力精到、則不能造也。前輩於左氏傳、太史公書、韓文杜詩、皆熟讀暗誦、雖支枕據鞍間、與對卷無異、久之乃能超然自得、今後生用力有限、掩卷而起、已十亡三四、而望有得於古人、亦難矣。

篇法有起、有束、有放、有斂、有喚、有應、大抵一開則一闔、一揚則一抑、一象則一意、無偏用

者あり、猶未だ盡く之れに法る可からざるがごとし、故に景明、歌行近體を學ぶに、二家に取ることありて、旁く唐初盛の詩人に及ぶ、而して古作は必漢魏に従ひ之れを求む。

王世貞が曰、賈島が「三月正當三十日」と顧況が「野人自愛す山中の宿」と同じく一法、抽を以て起して巧意の結語を喚び出す、俱に諷詠するに堪へたり。

陸放翁が集句杜詩の序に曰、要古作者の意を得るに在り、意既に深遠、力を用ふること精到なるに非ずんば、則造ること能はず、前輩左氏傳、太史公書、韓文、杜詩に於て、皆熟讀暗誦す、枕を支へ鞍に據るの間と雖、卷に對すると異なることなし、久ふして乃能く超然として自得す、今、後生力を用ふること限りあり、卷を掩ふて起てば、已に十に三四を亡ふ、而して古人に得ること有らんことを望むもの、亦難いかな。

篇法、起あり、束あり、放あり、斂あり、喚あり、應あり、大抵一開すれば則一闔、一揚すれば則一抑、一象すれば則一

者、第一相
詩訣

盧仝詩、喜用之字、青樓朱箔天之涯、林花撩亂心之愁、相逢之處艸茸茸、皆不俗。徐氏筆

精

司馬溫公曰、詩貴意在言外、使人思而得之、近世惟杜子美、最得詩人之體。

陸儼山曰、登山涉水之間、專事賦詩、則反礙真樂、葉石記、陳后山每登覽、得句卽急歸臥一榻、以被蒙首、家人知之、卽猫犬皆逐去、嬰兒稚子皆抱持寄鄰家、徐待其起、就筆硯、卽詩已成、乃敢復常、大是爲詩所苦、大抵江山旣勝、風日又佳、徒以良朋韻士、便當極躋攀眺望之興、罷從燈下、或月夕、追憶所遇、歷在目、然後發之詩文、庶幾各極其愜、而無累矣。

意偏用する者なし。第一相
詩訣

七〇

盧仝が詩に、喜んで之の字を用ゆ、「青樓朱箔天之涯」「林花撩亂心之愁」「相逢之處艸茸々」と、皆俗ならず。徐氏筆精

司馬溫公の曰、詩は意、言外に在りて人をして思ふて之れを得しむることを貴ぶ、近世惟、杜子美、最詩人の體を得たり。

陸儼山が曰、山に登り水を渉るの間、專詩を賦すること、を事とすれば、則反りて真樂に礙る、葉石記に、陳后山登覽する毎に、句を得れば、卽急に歸りて一榻に臥して、被を以て首に蒙る、家人之れを知りて、卽猫犬皆逐ひ去る、嬰兒稚子も皆抱持して鄰家に寄りて、徐く其起を待つ、筆硯に就けば、卽詩已成る、乃敢て常に復る、大に是れ詩の爲に苦めらる、大抵江山旣に勝れ、風日又佳なり、徒ふに良朋韻士を以てし、便當に躋攀眺望の興を極むべし、罷んで燈下、或は月夕に従ふて、追憶する所を追憶すれば、目に在り、然後之れを詩文に發す、庶幾くは各、其愜を極めて累ひ無けん。

方孝孺曰、作詩最重、丰致、意欲圓、語欲活、氣欲流暢、藏深思于寓言之中、發天趣于模題之外、可也。

陶淵明詩、平淡出於自然、後人學他、平淡便相去遠矣、某後生見人做得詩好、銳意要學、遂將淵明詩、平側用字一一依他做、到一月後、便解自做、不要他本子、方得作詩之法、朱子

同下

詩須是平易、不費力、句法混成、如唐人玉川子輩、句語雖險怪、意思亦自有混成氣象、因舉陸務觀詩、春寒催喚客、嘗酒夜靜臥聽兒讀書、不費力好。

學範曰、詩五法、曰體制、曰勢力、曰氣象、曰興趣、曰音節、蘇氏九品、曰高、曰古、曰深、曰遠、曰長、

方孝孺が曰、詩を作る、最、丰致を重んず、意は圓ならんことを欲し、語は活ならんことを欲し、氣は流暢ならんことを欲す、深思を寓言の中に藏し、天趣を模題の外に發して可なり。

陶淵明が詩、平淡、自然に出づ、後人他の平淡を學べば、便相去ること遠し、某後生、人か詩を做し得ること好きを見ては、意を銳にして學ばんことを要す、遂に淵明が詩を將て平側用字一々他に依りて做す、一月の後に到りて、便、自ら做すことを解して、他の本子を要せず、方に詩を作るの法を得たり。朱子、下同、

詩は須く是れ平易にして力を費さず、句法混成なるべし、唐人玉川子が輩の如き、句法險怪なりと雖、意思亦自ら混成の氣象あり、因て陸務觀が詩を舉ぐ、「春寒催し喚んで客酒を嘗め、夜靜にして臥して聽く兒の書を讀むを」と、力を費さずして好し。

學範に曰、詩の五法、曰體制、曰勢力、曰氣象、曰興趣、曰音節、蘇氏九品、曰高、曰古、曰深、曰遠、曰長、曰雄渾、曰飄逸、曰

曰雄渾、曰飄逸、曰悲壯、曰凄然嚴氏、七德一識

理、二高古、三典麗、四風流、五精神、六質幹、七

體裁然、詩貴、三多、讀多、記多、講明多、詩

去、五俗、一俗體、二俗意、三俗句、四俗字、五俗

韻辨詩、六開、篇法、句法、字法、氣象、家數、音節、

范氏、用工、用三、曰起結、曰句法、曰字眼、大

槩有、二、曰優游不迫、曰沉著痛快、極致有

一、曰入神嚴氏

又曰命意、作詩以命意爲主、古人云、操詞

易、命意難、信不誣矣、命意欲其高遠超詣出

入意表、與尋常迥絕、方可爲主、則詩、作詩先

命意、如構宮室、必法度形似備於胸中、始施

斤鉞

作詩準繩、〔立意〕要高古渾厚有氣槩、要沉

悲壯、曰凄然嚴氏、七德、一理を識る、二高古、三典麗、四風

流、五精神、六質幹、七體裁然、詩は三多を貴ぶ、讀むと多

く、記すること多く、講明すること多し、詩五俗を去る、

一俗體、二俗意、三俗句、四俗字、五俗韻辨詩、六開、篇法、句

法、字法、氣象、家數、音節范氏、工を用ふるに三あり、曰起

結、曰句法、曰字眼、大概一あり、曰優游不迫、沉著痛快、

極致一あり、曰入神嚴氏

又曰命意、詩を作る、命意を以て主と爲す、古人云ふ詞

を操ること易く、意を命すること難しと、信に誣ひず、意

を命ずるには其高遠超詣、意表に出入し、尋常と迥に絶

せんことを欲す、方に主と爲す可し、則詩、詩を作るには命

意を先に、宮室を構ふるが如し、必法度形似胸中に備

はりて、始めて斤鉞を施す。
詩を作る準繩、〔立意〕要高古渾厚にして氣槩あらんこと

著、忌卑弱淺陋、練句、雄偉清健、有金石聲、琢對、寧粗毋弱、寧拙毋巧、寧朴毋華、忌野俗、寫意、意中寓景、議論發明、寫景、景中含意、事中瞰景、要細密清淡、忌庸腐雕巧、書事、大而國事、小而家事、身事、心事、用事、陳古諷今、因彼證此、不可著迹、只使影子、雖死事實、活用、下字、或在腰、或在膝、或在足、最要精思、宜的當、押韻、押韻穩健、則一句有精神、如柱礎之欲其堅固也、詩法入門

曾氏曰、古人造語、每意精語潔、字愈少、意愈多、意在言外、悠然而長、黯然而光、此非後人之所能及、學範、下同○事文類聚、字事不可用、多

宋事也、又不用偏方理語之言、篤信案、類聚、字事、亦可採

初學詩法

を要す、沉着を要す、卑弱淺陋を忌む、練句、雄偉清健、金石の聲あり、琢對、寧ろ粗くも弱きと母れ、寧ろ拙くとも巧なると母れ、寧ろ朴なりとも華なると母れ、野俗を忌む、寫意、意中に景を寓し、議論發明す、寫景、景中に意を含み、事中に景を瞰ひ、細密清淡を要す、庸腐彫巧を忌む、書事、大にして國事、小にして家事、身事、心事、用事、古を陳べ、今を諷す、彼に因て此れを證し、迹を著く可からず、只影子をして死すと雖も、事實活用すべからしむ、下字、或は腰に在り、或は膝に在り、或は足に在り、最精思を要す、的當なるに宜し、押韻、韻を押すこと穩健なれば、則一句精神あり、柱礎の其堅固ならんことを欲するが如し、詩法入門

曾氏が曰、古人、語を造る毎に意精く語潔く、字愈、少くして意愈、多く、意、言外に在り、悠然として長く、黯然として光る、此れ後人の能く及ぶ所に非ず、學範、下同○事文類聚の字事、用ふ可らず、宋の事多ければなり、又偏方理語の言を用ひざれ、篤信案、するに、類聚の、字事、亦採用す可し、

沈約

之說

詩有八病、沈約一目平頭、第一第二字、不得與第六第七字同聲、如今日良宴會、謹樂難具陳、具陳今謹皆平聲、二曰上尾、第五字、不得與第十字同聲、如青々河畔艸、鬱鬱園中柳、艸柳皆上聲、三曰蜂腰、第二字、不得與第五字同聲、如聞君愛我甘、竊欲自修飾、君甘皆平聲、欲飾皆入聲、四曰鶴膝、第五字、不得與第十字同聲、如客欲遠方來、遺我一書札、上言長相思、下言久離別、來思皆平聲、五曰大韻、如聲鳴爲韻、上九字不得用驚神平聲字、六曰小韻、除本韻一字、外九字中不得有兩字同韻、如遙條不同切、七曰旁紐、八曰正紐、十字內兩字雙聲爲正紐、若不共一紐而有雙聲爲旁紐、如流久爲

沈約

之說

詩に八病あり、沈約一に曰平頭、第一第二字、第六第七字と同聲なるを得、今日良宴會、謹樂具陳し難し、の如き、具陳今謹皆平聲、二に曰上尾、第五字、第十字と同聲を得、青々たる河畔の艸、鬱々たる園中の柳の如き、艸柳皆上聲、三に曰蜂腰、第二字、第五字と同聲を得され、聞く君我れを愛すること甘なりと、竊に自ら修飾せんと欲す、の如き、君甘皆平聲、欲飾皆入聲、四に曰鶴膝、第五字、第十字と同聲を得され、客遠方より來り、我れに一書札を遺る、上には長く相思と言ひ、下には久く離別すと言ふ、が如き、來思皆平聲、五に曰大韻、聲鳴を韻と爲さば、上の九字驚神平聲の字を用ふるとを得ざるが如し、六に曰小韻、本韻の一字を除て、外九字の中兩字同韻あるを得ざれば、遙條切を同うせざるが如し、七に曰旁紐、八に曰正紐、十字の内、兩字雙聲を正紐と爲す、若し一紐を共にせずして而して、雙聲あるを旁紐と爲す、流久を正

正紐、流柳爲旁紐、八種惟上尾、鶴膝、最忌、餘病亦皆通、玉屑○張美和曰、八病之說、無足取者。

○論詩人第九

晉人舍陶淵明、阮嗣宗、外惟左太冲、高出一時、陸士衡獨在諸公之下、滄浪、下同

李杜二公、正不當優劣、太白有一二妙處、子美不能道、子美有一二妙處、太白不能作、子美不能爲、太白之飄逸、太白不能爲、子美之沉鬱。

少陵詩、如孫吳、太白詩法如李廣、少陵如節制之師、

釋皎然之詩在唐諸僧之上、唐人七言律詩、當以崔顥、黃鶴樓爲第一、

紐と爲し、流柳を旁紐と爲すが如し、八種、惟上尾、鶴膝、最忌む、餘病亦皆通す、玉屑○張美和が曰、八病の説、取るに足る者なし。

○詩人を論ず第九

晉人陶淵明、阮嗣宗を舍いては、外惟、左太冲、高く一時に出たり、陸士衡、獨諸公の下に在り、滄浪、下同、

李杜の二公、正に優劣あるべからず、太白、一二の妙處あり、子美道ふ能はず、子美一二の妙處あり、太白作す能はず、子美は太白が飄逸を爲す能はず、太白は子美が沉鬱を爲す能はず。

少陵が詩は孫吳の如し、太白が詩法は李廣の如し、少陵は節制の師の如し。

釋皎然が詩、唐の諸僧の上に在り。

唐人七言律詩、當に崔顥が黃鶴樓を以て第一と爲すべし。

杜紫微、越渭南が早秋の詩を覽て云ふ、殘星幾點ぞ、鷹、

杜紫微覽趙渭南早秋詩云、殘星幾點鴈橫塞、長笛一聲人倚樓、因目之爲趙倚樓、古今詩話

昌黎韓愈於文章少許可、至歌詩獨推曰、李杜文章在、光焰萬丈長、誠可信云、宋子景

柳子厚文不如退之、退之詩不如子厚、源流

文章大槩亦如女色、好惡只繫於人、蔡寬夫

詩話

東坡祭柳子玉文、郊寒島瘦、元輕白俗、此語具眼、許彥周

詩話

淵明之作、宜自爲一編、以附于三百篇、楚辭之後、爲詩之根本準則、眞西山

李杜長歌、所以妙者、有奇語、爲之骨、有麗語爲之姿、若十萬衆長驅而中無奇正器甲不

爲之姿、若十萬衆長驅而中無奇正器甲不

爲之姿、若十萬衆長驅而中無奇正器甲不

爲之姿、若十萬衆長驅而中無奇正器甲不

爲之姿、若十萬衆長驅而中無奇正器甲不

に横はり、長笛一聲人樓に倚る、因て之れを目して趙倚樓と爲す。古今詩話

昌黎の韓愈、文章に於て許可少し、歌詩に至りては推して曰く、「李杜文章在り、光焰萬丈長し」と、誠に信すべし。宋子景

柳子厚が文は退之に如かず、退之が詩は子厚に如かず。源流五論

源流五論

文章は大槩亦女色の如し、好惡只、人に繫る。蔡寬夫詩話

詩話

東坡、柳子玉を祭る文に郊は寒、島は瘦、元は輕、白は俗と、此語眼を具ふ。許彥周

許彥周

淵明が作、宜く自ら一編と爲して以て三百篇楚辭の後に附て詩の根本準則と爲すべし。眞西山

眞西山

李杜が長歌、妙なる所以は奇語ありて之れが骨と爲り、麗語ありて之れが姿と爲る、若し十萬の衆長驅して中に

麗語ありて之れが姿と爲る、若し十萬の衆長驅して中に

精麗何言師也。王世貞

李太白終始學選詩所以好杜子美詩好者亦多是傲選詩漸放手夔州諸詩則不然也

朱子下同

明道先生有詩曰時人不識予心樂將謂偷閒學少年此是後生時氣象眩露無含蓄

謝所以不及陶者康樂之詩精工淵明之詩質直而自然爾又曰唐人與宋人詩未論工拙直是氣象不同。學○篤信案明宋景濂答章秀才論詩書總論古來詩人可謂奇絕

奇正なく器甲精麗ならずんば何を師と言はん。王世貞

李太白終始選詩を學ぶ所以に好し杜子美詩好き者は亦多く是れ選詩に傲ふて漸く手を放つ夔州の諸詩は則然らず。朱子、下同、

明道先生詩あり曰時人は予の心の樂みを識らず將に謂はんとす閒を偷んで少年を學ぶと此は是れ後生の時の氣象眩露して含蓄なし。

謝の陶に及ばざる所以は康樂が詩は精工淵明が詩は質にして自然なるのみ又曰唐人と宋人の詩と未だ工拙を論ぜず直に是れ氣象同じからず。學○篤信案するに明の宋景濂章秀才に答へ詩を論ずる書總べて古來の詩人を論ず奇絶なりと謂ふ可し。

初學詩法
終